第15集

蓮ヶ池横穴群

保存整備事業概報Ⅲ

(昭和63年度計測調査概報)

1989

宮崎市教育委員会

史跡蓮ヶ池横穴群航空写真

序

宮崎市は、昭和59年に史跡蓮ヶ池横穴群保存環境整備事業の計画を決定し、年次的にその事業の遂行にあたってきたところであります。

昭和62年から本格的な整備工事を実施し、本年で、約50％の事業を完了し、指定当時の地形及び景観を変え、史跡公園としてのイメージが持てるところとなってきました。今後は、横穴の保存工事及び修景工事に力点を置いた整備工事を推進することになります。特に、指定地内に分布する横穴は、指定当時は50基足らずの確認でありましたが、毎年新発見の横穴が相次ぎ、今年度までに77基を数え今後もその基数を増すものと思われます。

昭和63年度の主な事業としては、横穴の発掘調査（23号～33号，35号～39号，74号の17基）、横穴保存工事（２～４号，６～８号横穴前面壁被覆強化，羨道部の復元強化、玄室内強化）、及び修景工事として、16号～21号前部広場、73号横穴前部広場、70号～72号横穴前部広場の整形造成、張り芝、植栽、ベンチの設置や四阿建設工事を行っております。

なお、本報告書は、発掘調査を主体とし、保存環境整備工事を加味したものであり、今後の横穴の保存活用に資することを念じるものであります。

本事業推進に貴重なご指導、ご助言をいただきました先生方、並びに作業に従事いただいた方々に感謝いたします。

平成元年３月

宮崎市教育委員会
教育長　柚木崎　　敏

例　　言

1．本書は、史跡蓮ヶ池横穴群保存環境整備事業にかかる、横穴群の事前計測調査記録の概報である。

2．本調査は、昭和63年度に国庫補助・県費補助を受けて、昭和63年10月18日から同年12月2日までの期間で、宮崎市教育委員会が実施した。

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体	宮崎市教育委員会		
調 査 員	文化振興課	係　　長	野 間 重 孝
調査補助	文化振興課	主　　事	浅 井　　清
	〃	嘱　　託	久 富 なをみ
	〃	臨　　時	塩 谷 健 志
横穴保存工事指導	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部		
	遺物処理研究室	室　　長	沢 田 正 昭
	〃	主任研究官	肥 塚 隆 保
	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部		
	史料調査室	保存科学研究員	村 上　　隆
保存環境整備指導	保存工学研究室	室　　長	田 中 哲 雄
事 務 局	宮崎市教育委員会	教 育 長	柚木崎　　敏
	〃	教育局長	守 田 達 朗
	〃	文化振興課長	野 田 卓 郎
	〃	課長補佐	松 元　　正

4．本概報の執筆は野間が行った。

5．掲載した図面の実測、整図、及び図版の作成は、野間、浅井、久富、永峰が分担して当たった。

6．写真撮影は、浅井が行った。

7．横穴墓の保存にかかる事前の調査及び発掘方法について、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部遺物処理研究室、沢田正昭室長、肥塚隆保主任研究官、同研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室、村上隆保存科学研究員に指導助言をいただいた。

8．保存環境整備事業について、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部保存工学研究室、田中哲雄室長に助言指導をいただいた。

9．本概報の編集は、野間が主として行った。

本文目次

第Ⅰ章　位置と環境及び事業の経緯 …… 1
　1　位置と環境 …… 1
　2　事業の経緯 …… 1

第Ⅱ章　昭和63年度保存環境整備事業の概要 …… 9
　1　横穴保存工事 …… 9
　2　修景工事 …… 9
　3　都市計画公園整備事業 …… 9

第Ⅲ章　発掘調査の概要 …… 16
　1　第2集団Bグループ …… 16
　　(1)　24号横穴 …… 16
　　(2)　25号横穴 …… 18
　　(3)　26号横穴 …… 20
　2　第2集団Cグループ …… 29
　　(1)　27号横穴 …… 29
　　(2)　28号横穴 …… 31
　3　第2集団Dグループ …… 37
　　(1)　23号横穴 …… 37
　　(2)　29号横穴 …… 39
　　(3)　30号横穴 …… 41
　　(4)　31号横穴 …… 43
　　(5)　35号横穴 …… 44
　4　第2集団Eグループ …… 46
　　(1)　36号横穴 …… 46
　　(2)　37号横穴 …… 50
　　(3)　38号横穴 …… 52
　　(4)　39号横穴 …… 55
　5　第2集団Fグループ …… 57
　　(1)　32号横穴 …… 57
　　(2)　33号横穴 …… 61
　　(3)　74号横穴 …… 65

第Ⅳ章　結　　語 …… 68

挿図目次

第１図　史跡蓮ヶ池横穴群位置図 …… 2
第２図　史跡蓮ヶ池横穴群全体地形図 …… 3
第３図　史跡蓮ヶ池横穴群分布図 (1) …… 5
第４図　史跡蓮ヶ池横穴群分布図 (2) …… 7
第５図　保存工事図面 (1) 第２，３，４号横穴遺構復元図 …… 11
第６図　保存工事図面 (2) 第６号横穴遺構復元図 …… 12
第７図　保存工事図面 (3) 第７号横穴遺構復元図 …… 13
第８図　保存工事図面 (4) 第８号横穴遺構復元図 …… 14
第９図　グループ図(Ｂ，Ｃ，Ｅ) …… 15
第10図　24号横穴実測図 …… 17
第11図　25号横穴実測図 …… 19
第12図　26号横穴実測図 …… 21
第13図　26号横穴出土遺物実測図 (1) …… 23
第14図　26号横穴出土遺物実測図 (2) …… 25
第15図　26号横穴出土遺物実測図 (3) …… 27
第16図　27号横穴実測図 …… 30
第17図　27号横穴出土遺物実測図 …… 31
第18図　28号横穴実測図 …… 32
第19図　28号横穴出土遺物実測図 …… 34
第20図　グループ図(Ｄ，Ｆ) …… 36
第21図　23号横穴実測図 …… 38
第22図　29号横穴実測図 …… 40
第23図　30号横穴実測図 …… 42
第24図　31号横穴実測図 …… 44
第25図　35号横穴実測図 …… 45
第26図　36号横穴実測図 …… 48
第27図　37号横穴実測図 …… 51
第28図　38号横穴実測図 …… 54
第29図　39号横穴実測図 …… 56
第30図　32号横穴実測図 …… 59
第31図　32号横穴出土遺物実測図 …… 61
第32図　33号横穴実測図 …… 62
第33図　33号横穴出土遺物実測図 …… 64
第34図　74号横穴実測図 …… 66
第35図　74号横穴出土遺物実測図 …… 67

図版目次

図版１　史跡蓮ヶ池横穴群遠景(第２集団Ｂ～Ｆグループ) …… 16
図版２　24号横穴 …… 16
図版３　24号横穴玄室及び奥壁 …… 18
図版４　25号横穴 …… 18
図版５　25号横穴玄室及び壁面 …… 20
図版６　26号横穴前庭部遺物出土状況 …… 20
図版７　26号横穴玄室壁面 …… 22
図版８　26号横穴玄室及び羨道部状況 …… 28
図版９　26号横穴羨道部遺物出土状況 …… 28
図版10　27号横穴 …… 29
図版11　27号横穴玄室天井部 …… 29
図版12　28号横穴 …… 31
図版13　28号横穴玄室 …… 35
図版14　28号横穴羨道部遺物出土状況 …… 35
図版15　第２集団Ｂ，Ｄ，Ｅグループ全景 …… 36
図版16　第２集団Ｄグループ全景 …… 37
図版17　23号横穴 …… 37
図版18　23号横穴玄室及び奥壁 …… 39
図版19　29号横穴 …… 39
図版20　29号横穴玄室及び奥壁 …… 40
図版21　30号横穴 …… 41
図版22　30号横穴玄室及び奥壁 …… 41
図版23　31号横穴 …… 43
図版24　31号横穴玄室 …… 43
図版25　35号横穴 …… 46
図版26　35号横穴玄室及び奥壁 …… 46
図版27　第２集団Ｆグループ全景 …… 47
図版28　36号横穴 …… 47
図版29　36号横穴玄室及び羨道部調整痕状況 …… 49
図版30　36号横穴天井部調整痕状況 …… 49
図版31　36号横穴玄室床面 …… 50
図版32　37号横穴 …… 50
図版33　37号横穴玄室及び奥壁 …… 52
図版34　38号横穴 …… 52

図版35　38号横穴玄室及び羨道部 …… 53
図版36　38号横穴玄室 …… 53
図版37　39号横穴 …… 55
図版38　39号横穴玄室 …… 55
図版39　32号横穴 …… 57
図版40　32号横穴墓道及び羨道部 …… 58
図版41　32号横穴玄室内礫床状況 …… 58
図版42　33号横穴 …… 61
図版43　33号横穴玄室 …… 63
図版44　33号横穴線刻画（玄室西側壁面） …… 63
図版45　74号横穴 …… 65
図版46　74号横穴玄室床面 …… 66
図版47　2号～5号横穴保存工事（着手前全景） …… 73
図版48　2号～5号横穴保存工事（ステンレス骨組支柱） …… 73
図版49　2号～5号横穴保存工事（下地ＦＲＰ貼付作業） …… 74
図版50　2号～5号横穴保存工事（下地ＦＲＰ貼付作業） …… 74
図版51　2号～5号横穴保存工事（下地ＦＲＰ貼付） …… 75
図版52　2号～5号横穴保存工事（下地ＦＲＰ貼付後のステンレス骨組み） …… 75
図版53　2号～5号横穴保存工事（発泡ウレタン吹付） …… 76
図版54　2号～5号横穴保存工事（発泡ウレタン被覆ＦＲＰ貼付） …… 76
図版55　2号～5号横穴保存工事（擬土貼付） …… 77
図版56　2号～5号横穴保存工事完了全景 …… 77
図版57　6号～8号横穴保存工事完了全景 …… 78
図版58　8号横穴保存工事（擬土貼付前のステンレス金網取付） …… 78
図版59　8号横穴保存工事（発泡ウレタン吹付） …… 79
図版60　6号横穴保存工事（下地ＦＲＰ貼付後のステンレス骨組み） …… 79
図版61　6号横穴保存工事（下地ＦＲＰ貼付） …… 80
図版62　6号～8号横穴保存工事着手前全景 …… 80
図版63　修景工事（70号～72号横穴前庭広場着工前） …… 81
図版64　修景工事（73号横穴前庭広場着工前） …… 81
図版65　修景工事（16号～21号横穴前庭広場着工前） …… 82
図版66　修景工事（16号～21号横穴前庭広場暗渠付設） …… 82
図版67　修景工事（16号～21号横穴前庭広場張芝作業状況） …… 83
図版68　修景工事（植栽樹木計測状況） …… 83
図版69　修景工事（70号～72号横穴前庭広場張芝他完成） …… 84
図版70　修景工事（73号横穴前庭広場張芝他完成） …… 84
図版71　修景工事（16号～21号横穴前庭広場張芝他完成） …… 85
図版72　修景工事（73号横穴前庭広場ベンチ工完成） …… 85
図版73　修景工事（70号～72号横穴前庭広場四阿完成） …… 86
図版74　修景工事（70号～72号横穴前庭広場完成） …… 86
図版75　修景工事（73号横穴前庭広場完成） …… 87
図版76　修景工事（16号～21号横穴前庭広場完成） …… 87
図版77　26号横穴出土遺物　(1) …… 88
図版78　26号横穴出土遺物　(2) …… 89
図版79　27号横穴出土遺物 …… 89
図版80　28号横穴出土遺物 …… 90
図版81　32号横穴出土遺物 …… 91
図版82　33号横穴出土遺物 …… 92
図版83　74号横穴出土遺物 …… 92

第Ⅰ章　位置と環境及び事業の経緯

1．位置と環境

史跡蓮ヶ池横穴群は、市街地の北部、宮崎市大字芳士字岩永迫に位置し、この一帯は通称「蓮ヶ池」と呼称されているところで、国道10号線とＪＲ日豊本線に挟まれた、東西約１㎞南北約1.3㎞の沖積平野に突出した丘陵地である。

この丘陵地は、中池、田池、蓮ヶ池によって二分され、南側丘陵は宅地造成が成されている。北側丘陵は一部を除いて自然地形が保たれている。

北側丘陵の分水嶺により、南側部が国の史跡として指定されている。この指定地内は、西側に稲荷池、そして湿地の谷間、それに御諏訪池と南北に入り込む谷間と、それぞれ南に延び出す丘陵で形成されており、これら斜面に横穴分布が見受けられ、現在までに77基の横穴が確認されているが、毎年、数基の横穴が発見されており、その数を増していくものと思われる。

なお、横穴のグルーピングについては、「蓮ヶ池横穴群　保存環境整備事業概報Ⅱ　1988」に記載しているため割愛するが、今年度新たに確認した76号横穴は、32号横穴の北西上段に開口しているため、第２集団グループに属し、77号横穴は、24号横穴の西側に接して開口しているため、第２集団Ｂグループに属することになる。

2．事業の経緯

史跡蓮ヶ池横穴群は、従来は、県指定「住吉村古墳」として知られるところであったが、昭和40年代になって、大規模開発（宅地造成）の計画が進み、急遽昭和44年に県教育委員会によって、緊急発掘調査が行われた。群墓を成す横穴墓分布の南限にあたることもあり、この緊急発掘調査の結果から、昭和46年７月17日に国の史跡指定を受けている。

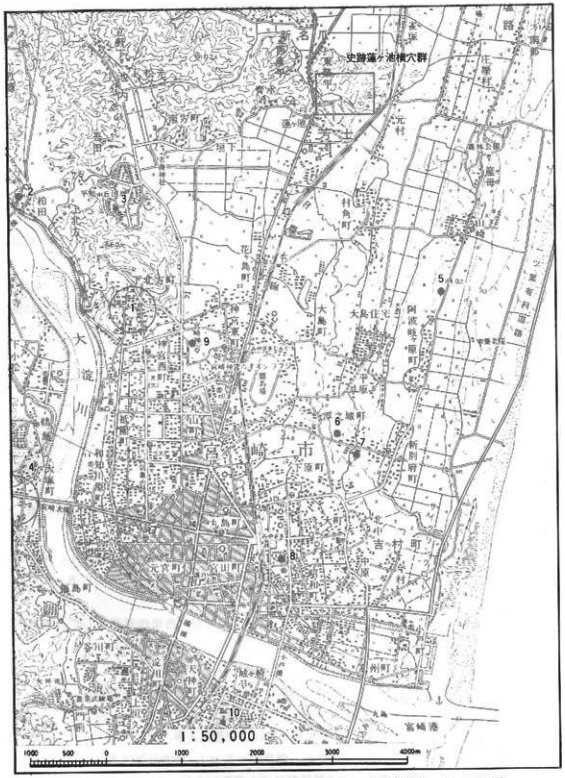
昭和47年から50年にかけて、国庫補助を受けて、史跡地114,703.17㎡を公有化している。その他、指定地に隣接する用地約33,000㎡を市で単独買収している。

昭和59年市制60周年記念事業として、史跡蓮ヶ池横穴群保存環境整備事業を決定し、同年基本構想を策定し、昭和60年基本設計を行うとともに、横穴の発掘調査（２～４号、６～８号、９～11号、12号の10基）及び見学道の一部を建設している。

昭和61年度は、12号横穴保存工事（前室内復元工事）のほか、市単独事業として幹線道路（延長Ｌ＝335ｍ、幅員Ｗ＝５ｍ）の建設を行っている。

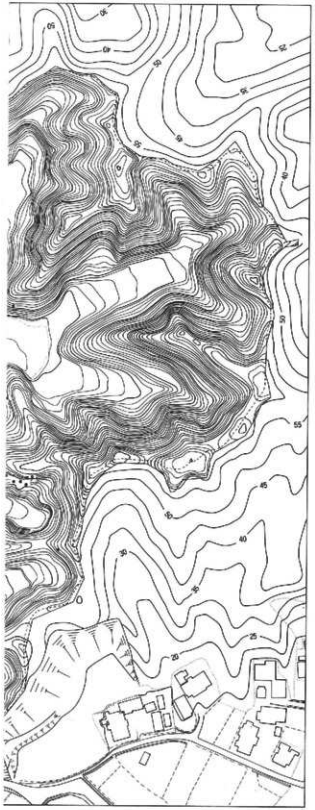
昭和62年度は、横穴発掘調査（13～21号の９基）、横穴保存工事（２～４号、６～８号の樹脂注入による補強工事、９～11号の復元補強工事）、修景工事（12号横穴周辺植栽工事、９～11号前庭部修景工事、６～８号前庭部修景工事）、見学道建設（延長Ｌ＝81ｍ，幅員Ｗ＝２ｍ）を行うとともに、市単独事業として、駐車場用地買収及び造成工事、広場工事（低地広場の排水造成）、幹線道路建設工事（延長Ｌ＝320ｍ，幅員Ｗ＝５ｍ）、溜池改修工事（取水、盛土、法面工事）、都市計画公園整備事業（中央低地粗造成工事等）を行っている。

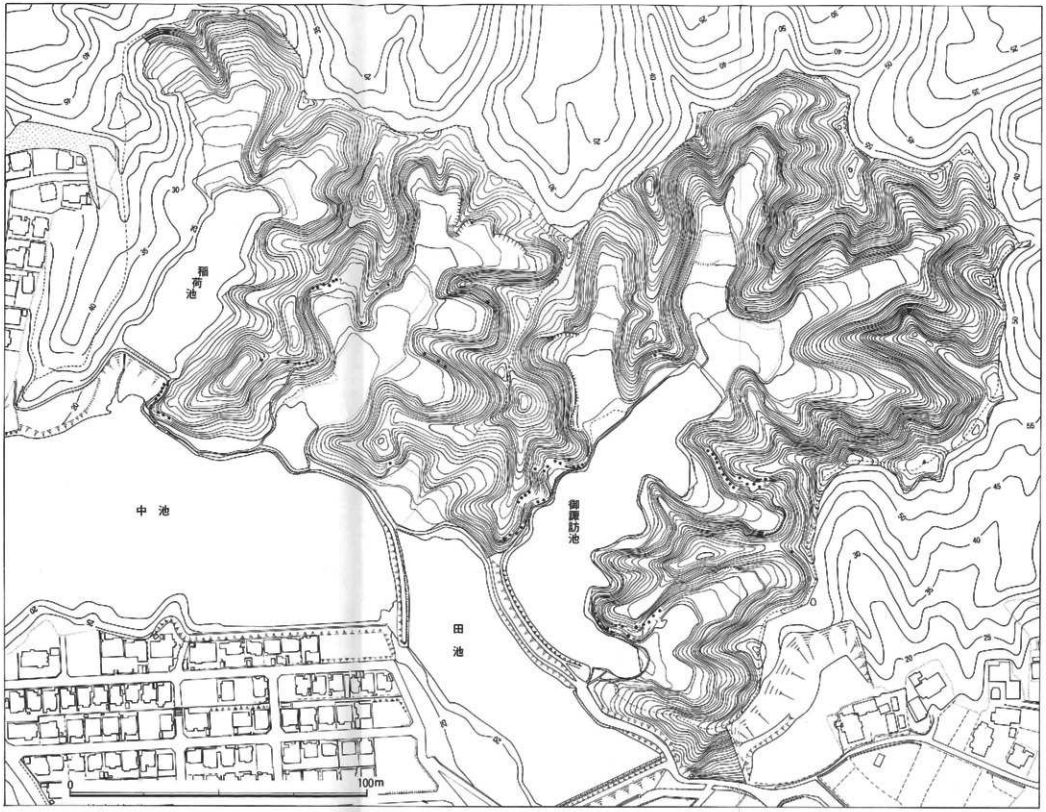
昭和63年度の事業の概要は、次章で述べることにする。



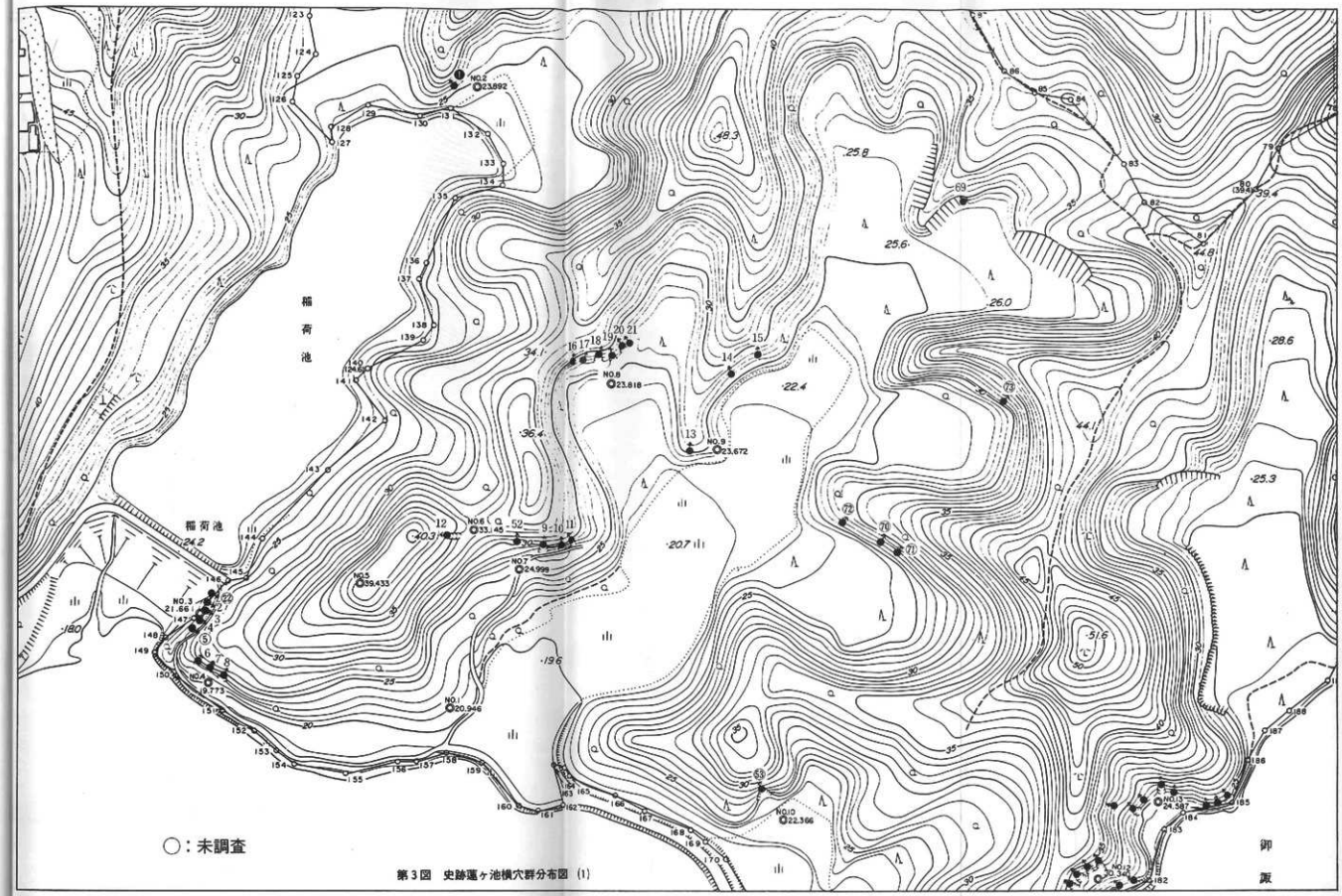
1．下北方古墳群　2．柏田貝塚　3．池内横穴群　4．大淀古墳群　5．石神遺跡
6．浮之城遺跡　7．樋遺跡　8．浄土江遺跡　9．船塚古墳　10．恒久古墳

第1図　史跡蓮ヶ池横穴群位置図

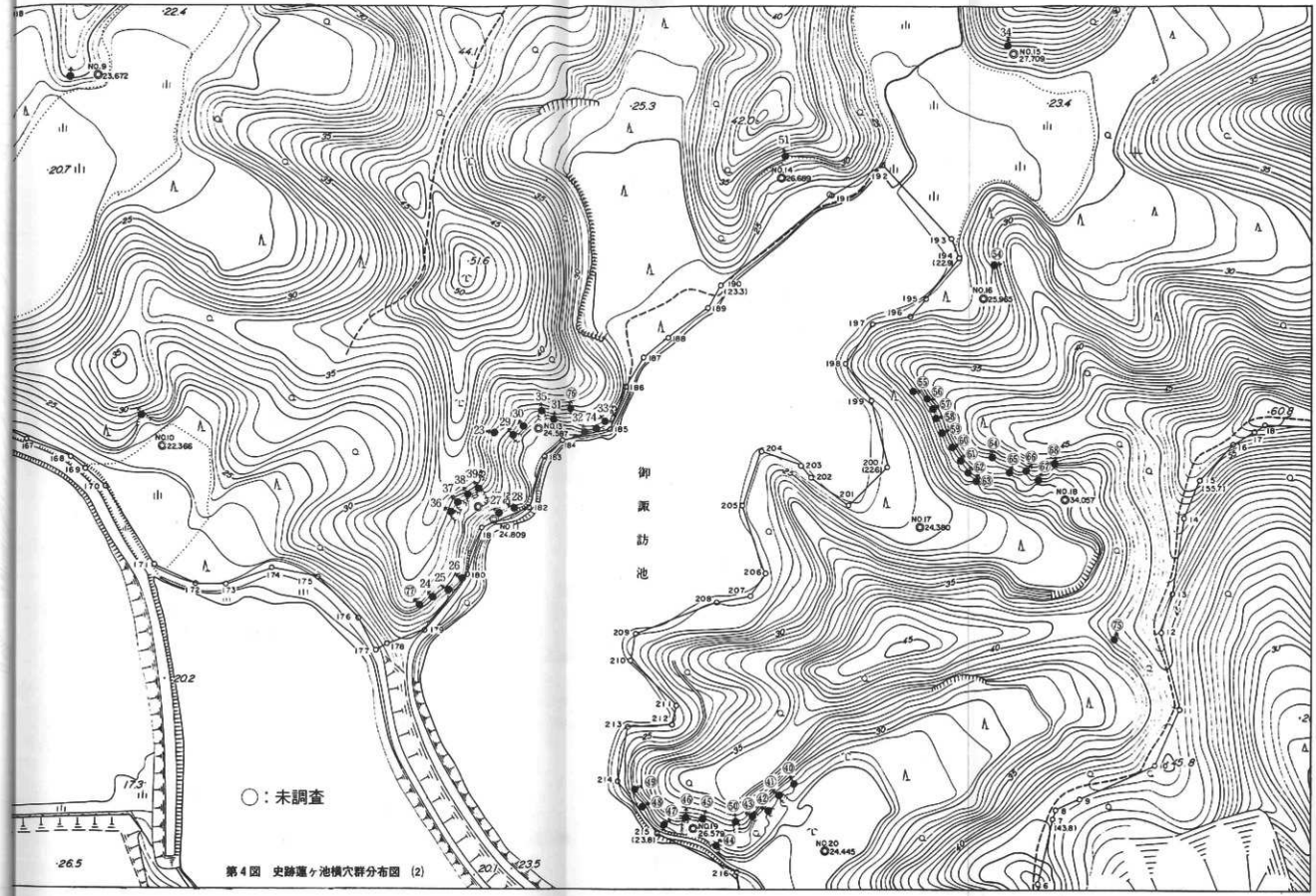




第2図　史跡蓮ヶ池横穴群全体地形図



第3図　史跡蓮ヶ池横穴群分布図（1）



第4図　史跡蓮ヶ池横穴群分布図　(2)

第Ⅱ章　昭和63年度　保存環境整備事業の概要

昭和63年度は、横穴保存工事、修景工事、横穴発掘調査を実施している。その他、都市計画公園整備事業としては、丘陵中央部北方向に入り込む低湿地の造成工事、御諏訪池西対岸園路工事及び排水路設置工事を行っている。

1．横穴保存工事

指定地内西側丘陵先端部西斜面に分布し、第１集団Ａグループに属する２，３，４，５，22号横穴及び同丘陵先端部南斜面に分布し、第１集団Ｂグループに属する６，７，８号横穴の保存工事を実施している。

２，３，４，５，22号横穴保存工事については、５号及び22号は未調査の横穴であったため、保存修復は最小限度にとどめ、２，３，４号横穴を主体とする保存工事を実施した。２，３，４号横穴については、本年度は横穴前面部及び羨道部の二次保存処理を行った。工法としては、樹脂の壁面への含浸後、ガラス繊維を混ぜたＦＲＰを吹き付け、ステンレスの骨組みを組んだのち発泡ウレタンを吹き付け、それにステンレス金網の貼り付け、さらに、ＦＲＰを吹き付け、ＦＲＰで発泡ウレタンを包む形とし、仕上げとして、擬土（樹脂と土を混ぜたもの）を貼り付けるものである。

６，７，８号横穴保存工事については、昭和62年度に横穴天井部の崩落の恐れが強く、樹脂注入による一次保存処理を行ったが、本年度は横穴前面部及び羨道部の二次保存処理を行った。工法としては、２，３，４号の横穴の保存工事と同様のものである。

2．修 景 工 事

指定地内西側丘陵東斜面支谷奥に分布し、昨年度計測調査を実施した16～21号横穴の前庭広場の修景工事、中央丘陵西斜面支谷南側斜面に分布する70～72号横穴前庭広場修景工事及び70～72号横穴より更に一つ南の支谷南側斜面に分布する73号横穴前庭広場修景工事を行った。

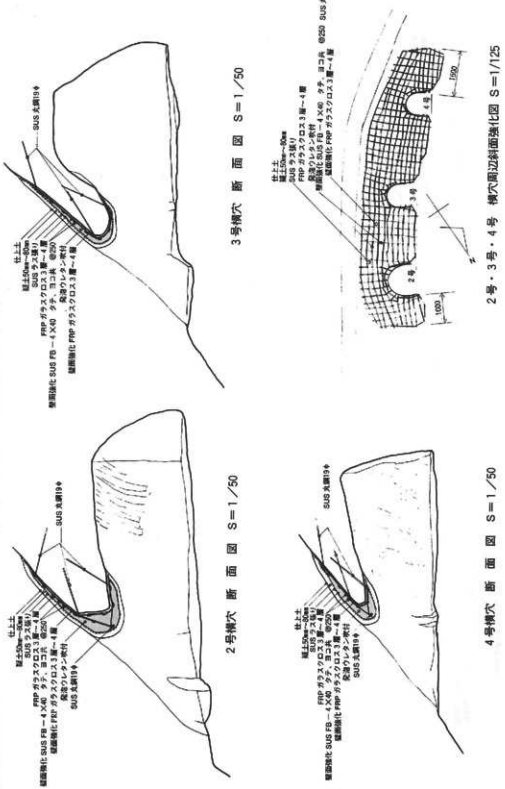
16～21号横穴の前庭広場の修景工事では、横穴保護のため、横穴の前部に開ける平坦面に植栽された杉の伐採除根を行い、盛土工、排水路設置工、張り芝、植栽、ベンチ(3)工を行った。また、70～72号横穴の前庭広場の修景工事では、雑木等の伐採除根、盛土工、排水路設置工、張り芝、植栽、休憩所としての四阿建設を行った。更に73号横穴の前庭広場の修景工事では、雑木等の伐採除根、盛土工、排水路設置工、張り芝、植栽、ベンチ(2)工を行った。

3．都市計画公園整備事業

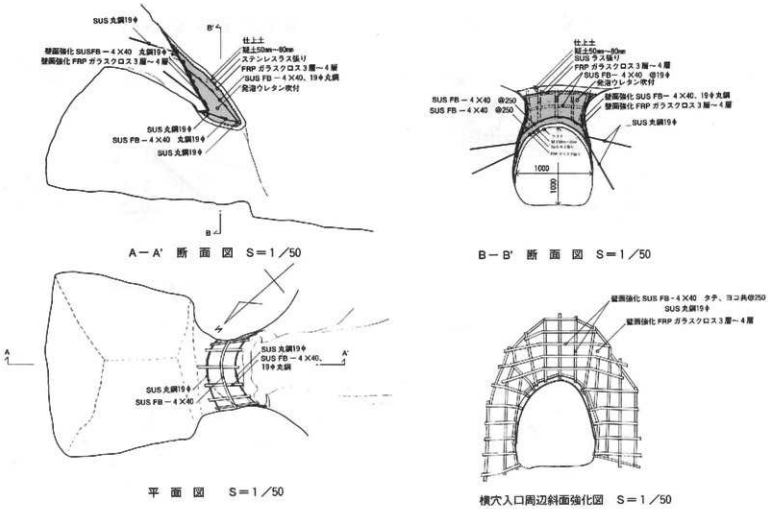
建設省の補助を受けて行う都市計画公園整備事業では、本年度は、史跡地中央低地の盛土造

成工事を行った。昨年度行った粗造成工事に継続するもので、約0.16 ha に約550㎥の盛土造成工事を行うとともに、排水路設置工事を行った。また、指定地となる谷の奥部の湿地は、葦、小灌木及び杉の植栽が見受けられるため、横穴への棄損を与えない範囲内において、史跡地の効率的活用を図るため、現状変更の手続きをとり指定地外と同様の造成工事を行った。

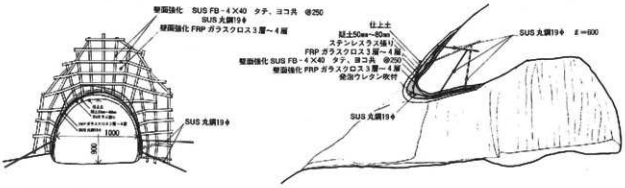
更に、御諏訪池西対岸に見学道及び管理道を兼ねた園路（延長210 m ）を建設した。御諏訪池西対岸には横穴が分布しており、現状では、既存道（里道）下にも一部横穴の分布が見られるため、路線大半は、御諏訪池用地を新たに買収して建設を行うこととし、横穴の分布しない一部指定地内においては、現状変更手続きを行い、盛土造成による園路設置工事を行った。本年度実施した計測調査で横穴の分布及び範囲を確認したのち、指定地内の園路設置工事を施行した。

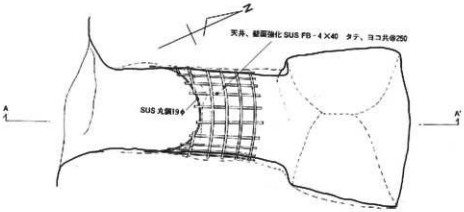


第5図 保存工事図面 (1) 第2号、3号、4号横穴復元図

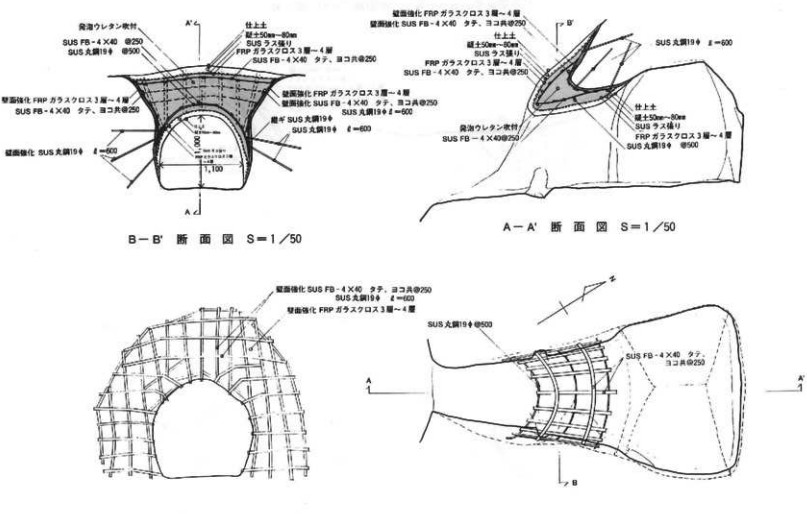


第6図　保存工事図面 (2) 第6号横穴遺構復元図

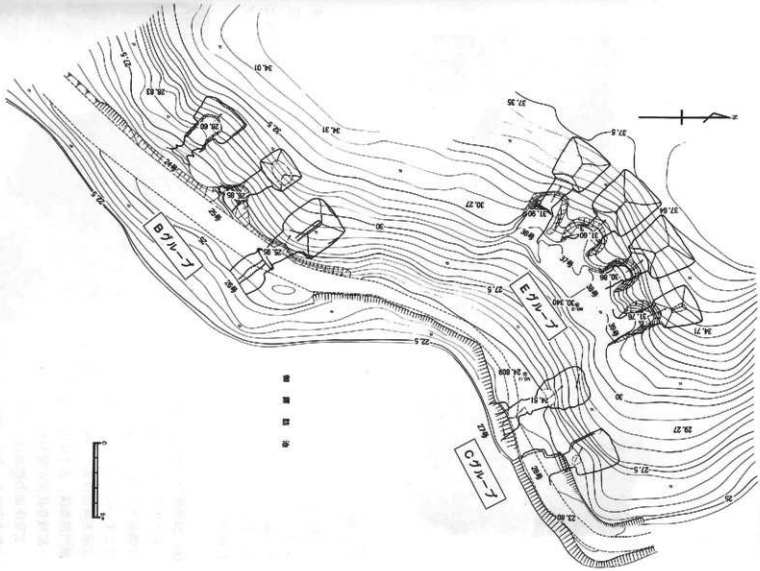




第7図　保存工事図面 (3) 第7号横穴遺構復元図

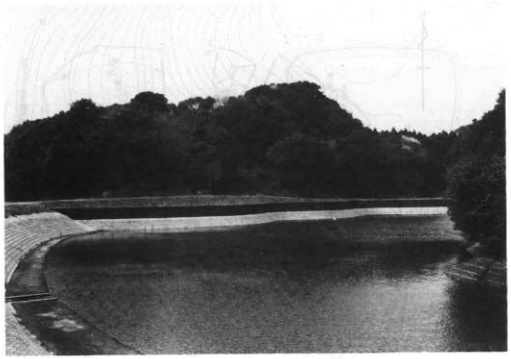


第８図 保存工事図面 (4) 横穴遺構復元図



第９図 グループ図 (B、C、E)

第Ⅲ章　発掘調査の概要



図版１　史跡蓮ヶ池横穴群遠景

１．第２集団Ｂグループ（24，25，26，77号）

史跡地中央部に北方向に入り込む谷間と、東に位置する御譲訪池との間に南方向に延びだす丘陵の東斜面に分布する横穴を第２集団として、グルーピングしている。このグループは、丘陵先端南東斜面に分布する横穴群で、従来は、24～26号の３基が確認されていたが、今回新たに24号横穴の南西方向約４ｍ離れて１基が確認され、この横穴を77号横穴として同グループに追加したが、この横穴の発掘調査は行わなかった。

(1)　24号横穴（第10図）（図版２，３）

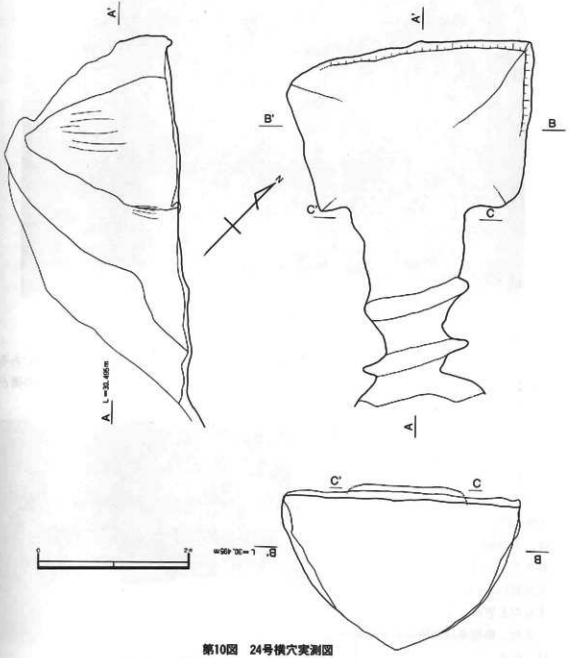
Ｂグループとしては、一段高い位置に構築された横穴であり、早くから開口していたものと思われ、羨道部及び玄室天井部は著しく崩落しているが、羨門閉塞溝、玄室床面及び玄室奥壁に一部残存状況が窺われる。

玄室床面の標高は、29.7ｍ内外で、主軸方向はＮ－44°－Ｗを示す。羨道は幅1.5ｍ，長さ1.2ｍの床面をもち、

図版２　24号横穴

平入りタイプの玄室に至る。

玄室は、入口幅2.5ｍ、奥壁部幅3.2ｍ、長さ2.2ｍで、天井は現高で2.2ｍを測り、「寄棟造り」構造を成すものと思われる。また、玄室床面には奥壁及び東側壁の仕上り部位に幅10cm、深さ８cmの排水溝の付設が見受けられる。墓道及び前庭部の付設はなかったものと思われ、羨門口において閉塞を伴うものと思われる袖をもった二重の溝が見受けられた。



第10図　24号横穴実測図

24号横穴出土遺物

今回の調査では遺物の出土はなかったが、昭和44年時(注)の調査により、須恵器（坏蓋、坏口縁部片、短頸壺片、甕体部片)、土師器（坏口縁部片)、鉄器（刀子、不明鉄器、鉄鏃)、馬具、装身具（金環３個）が出土している。

図版３　24号横穴玄室及び奥壁

(2)　25号横穴（第11図）（図版４，５）

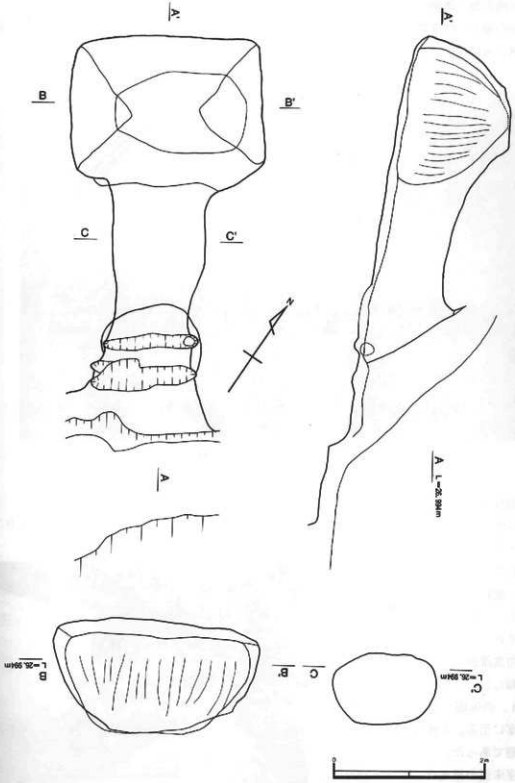
24号横穴北側に並列し、一段下がった位置にあり、小型でかなり保存状態の良い横穴である。小範囲の前庭部をもち、閉塞に伴うものと思われる袖をもち、浅い掘り込みをもつ二重の溝が見受けられる。

羨道は、入口幅1.1ｍ、玄室部幅1.3ｍ、長さ２ｍ、高さ0.9ｍの細長の構造をもち、平入りタイプの玄室に至る。

玄室床面の標高は、26.4ｍ内外で、主軸方向はＮ－32°－Ｗを示す。玄室は、入口幅2.4ｍ、奥壁部幅2.4ｍ、長さ２ｍの長方形状の床面をもち、天井高1.5ｍの「寄棟造り」構造を成すものと思われる。

また、奥壁及び側壁に調整痕が見受けられる。

図版４　25号横穴



第11図　25号横穴実測図

25号横穴出土遺物

今回の調査では遺物の出土はなかったが、昭和44年時(注)の調査により、須恵器（坏口縁部片、甕口縁部片）のほかに、土師器小片が出土している。

図版5　25号横穴玄室及び壁面

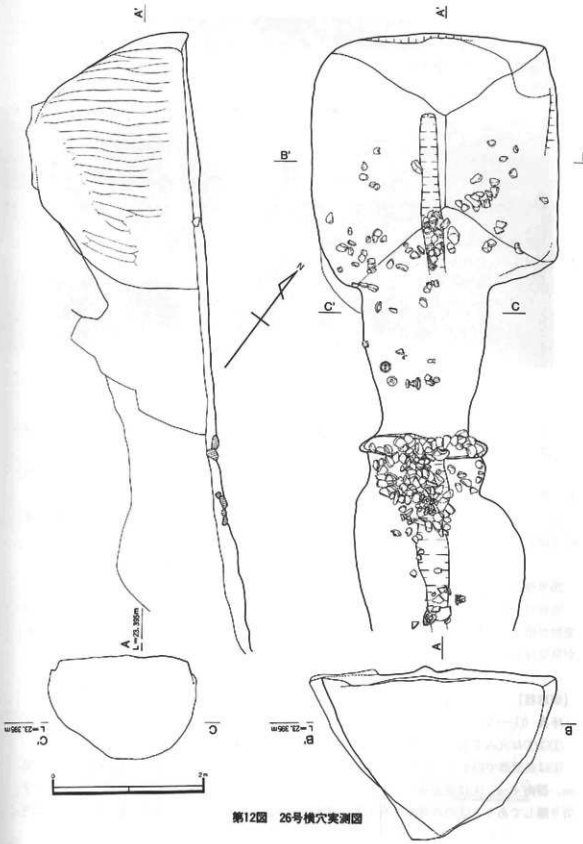
(3)　26号横穴（第12図）（図版6～9）

25号横穴北側に並列し、一段下がった位置にあり、この横穴は、羨道及び墓道が里道より下位にあることから、昭和44年の調査では見送られたものである。

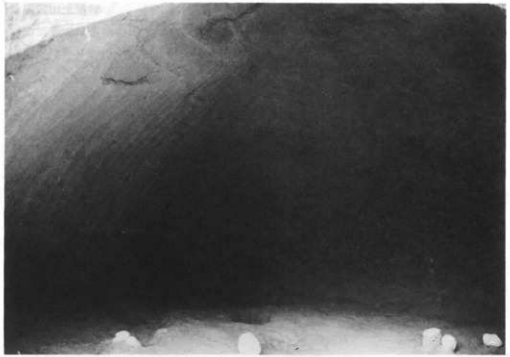
幅約2ｍの墓道をもち、墓道中央部には、縦に幅約40㎝の浅い溝を付設している。羨道入口に閉塞石が残っており、それらを取り除くと、下部に袖をもつ閉塞溝が見受けられる。羨道は、入口幅1.2ｍ、玄室部幅1.7ｍ、長さ2.1ｍ、の床面をもち、妻入りタイプの玄室に至る。天井部は完全に崩落した状態であった。

図版6　26号横穴前庭部遺物出土状況

玄室床面の標高は、22.7ｍ内外で、主軸方向はＮ－37°－Ｗを示す。玄室



第12図　26号横穴実測図



図版７　26号横穴玄室壁面

は、入口幅2.８ｍ、奥壁部幅2.８ｍ、長さ3.４ｍの長方形状の床面をもち、天井高2.２ｍの「寄棟造り」構造を成すものと思われる。

玄室内部に散乱状態の川原石を見ることができるが、これらはおそらく閉塞石の流入と思われ、礫床の存在は薄いものと思われる。

また、玄室床面には、奥壁及び側壁の立上り部位と、中央部主軸方向に排水溝と見られる溝の付設が見受けられる。なお、玄室側壁には調整痕が残る。

26号横穴出土遺物（第13～15図）（図版77，78）

昭和44年時の調査では、未調査であったもので、今回の調査で、墓道及び羨道部から多くの遺物が出土している。須恵器がその大半を占め、土師器、鉄鏃、それに装身具としての切子玉が見受けられる。

【須恵器】

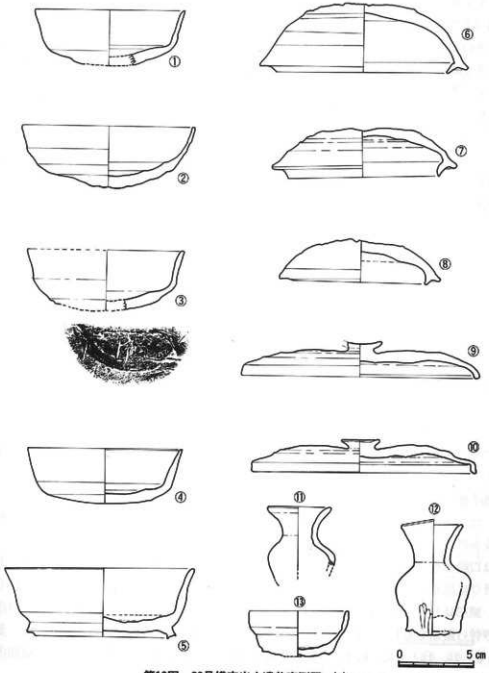
坏身（①～⑤）

①③④は丸みをもつ平底から体部は屈曲し、口縁部は外開きに立ち上がる。

①は前庭部で出土したもので、口径10㎝、器高3.６㎝、③は玄室内で出土したもので、口径10.35㎝、器高４㎝、④は羨道部で出土したもので、口径10.３㎝、器高3.６㎝で、底部はすべてヘラ切り離しであり、③のみ窯印を有する。体部、口縁部ともにヨコナデ調整が施され、底部は内

外面ともに仕上げナデが見受けられる。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で灰色を呈する。

②は羨道部で出土したもので、丸みをもった底部から体部、口縁部へと内湾気味に立ち上がり、口縁部は薄くなる。口径11.５㎝、器高4.１㎝で、底部はヘラ切り離しである。体部、口縁部ともにヨコナデ調整が施され、底部内面には仕上げナデが見受けられる。胎土に少量の白色



第13図　26号横穴出土遺物実測図（1）

砂粒を含み、焼成は良好で灰色を呈し、一部に自然灰釉が見受けられる。

⑤は前庭部で出土したもので、高台付坏である。高台裾部は、短く外開きとなり、高台端部内外に小さい突起状の接着面をもつ。底部から体部にかけて屈曲をもち、口縁部は外開きに立ち上がる。口径12.7㎝、坏部器高4.1㎝に高さ0.4㎝の高台をもつ。高台、体部口縁部ともにヨコナデ調整が施され、底部内面はヨコナデ調整後、複数の仕上げナデが見受けられる。胎土に細砂粒を少量含み、焼成は良好で青灰色を呈する。

坏蓋（⑥～⑩）

⑥～⑧は口縁端部に受け部のかえりをもち、天井部にツマミを有しないもので、⑨⑩は天井部にボタン状のツマミを有し、口縁端部に受け部の反りをもたない２種類がある。

⑥⑦⑧は大中小となり、天井部にヘラ切り離しが見受けられる。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈する。

⑥は羨道部で出土したもので、口径11.3㎝、受け部径14㎝、器高4.5㎝で内面のかえりはやや高く、口縁面より0.4㎝突出する。体部から口縁部はヨコナデ調整が施され、天井部内側及び口唇部に仕上げナデが見受けられる。

⑦は羨道部で出土したもので、口径10.1㎝、受け部径12.4㎝、器高3.1㎝で内面のかえりは高く、口縁面より0.6㎝突出する。受け部内面に凹みが見られ稜を成す。体部から口縁部はヨコナデ調整が施され、天井部内側に仕上げナデが見受けられる。

⑧は玄室内で出土したもので、口径8.8㎝、受け部径10.7㎝、器高2.7㎝で、内面のかえりは低く、口縁面より0.15㎝突出する。体部から口縁部はヨコナデ調整が施され、天井部内側及び口縁部に仕上げナデが見受けられる。

⑨⑩は大型の坏蓋で、天井部にボタン状のツマミを貼り付けている。いずれも、胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で白灰色を呈する。

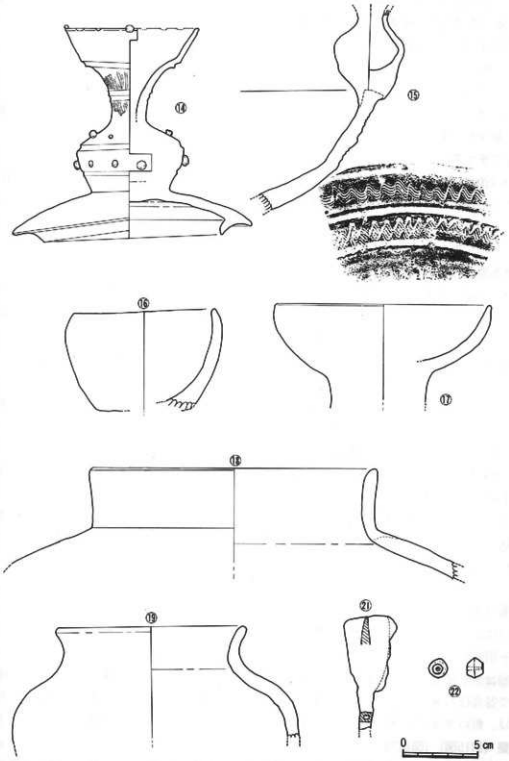
⑨は前庭部で出土したもので、口径15.8㎝、器高2.4㎝で、口縁部がわずかに内湾する。体部、口縁部ともにヨコナデ調整が施され、天井部内側に仕上げナデが見受けられる。

⑩は前庭部で出土したもので、口径15㎝、器高2.1㎝で、口縁面は端部において短く屈曲した受け部となっている。体部、口縁部ともにヨコナデ調整が施され、天井部内側及び口縁部に、ヨコナデ後の仕上がナデが見受けられる。

装飾小壺付高坏（⑪，⑫，⑮）

⑪，⑫は羨道部出土で、装飾小壺付高坏の装飾小壺となるものと思われ、第14図⑮とセットになるものと思われる。

⑪は口縁部が大きく外反し、頸部はしまり、肩部に張りをもつミニチュアの広口壺であり、胴部及び底部を欠いている。口径4.3㎝で器高は不明である。⑫は口縁部が⑪ほど外反しておらず、頸部はしまり、肩部が張り、胴部から底部へは長方形状に絞られており、高坏口縁部への貼り付け断面をもち、剥離状況を見受ける。器形はゆがみを生じており、口径４㎝、器高約7.6㎝で、⑪，⑫ともに、胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で灰色を呈し、口縁部内外面及び肩部に自然釉の付着が見受けられる。



第14図　26号横穴出土遺物実測図（2）

⑬は前庭部出土で、脚部を欠いた高坏の坏部口縁に装飾小壷をもった破片である。坏部は、底部から内湾気味にゆるやかに立ち上がり、体部において、あまい稜をもってさらに立ち上り、口縁部は平たく、端部が細かく外反する。口縁端部外反面に稜線をもち、下部に指先で押し引きした感じの沈線を2本もち、上下沈線間に5筋の櫛描波状紋をめぐらしている。口縁部にミニチュアの広口壷を貼り付けており、内側に指による押し引き貼り付け痕を残している。装飾壷にはヨコナデ調整が見られ、坏部、底部外面にヨコナデ調整が見受けられる。胎土に細砂粒を少量含み、焼成は良好で灰黒色を呈し、全体的に自然釉の付着が見受けられる。

ミニチュア坏身（⑬）

⑬は羨道部出土で、ヘラ切り離しの底部から体部は外傾気味に立ち上り、体部上部においてはあまい稜線をもって、口縁部は内傾気味に立ち上り、口唇部は突がる。口径6.6cm、器高3cmで、外面はヨコナデ調整で、内面は風化しており調整は不明である。口縁部及び底部内面に自然釉の付着が見受けられる。

聰形壷（⑭）

⑭は羨道部出土で、受け部のかえりをもつ坏壷天井部に装飾として聰を付けた形態を呈し、類例の乏しい資料である。坏部に相当する部位は受け部かえりが高く、口縁部より、突出する。口径約16cm、受け部径11.8cmで、体部中央部に9個の粒子状突起貼り付けをめぐらしている。聰部に相当する部位は、肩部に最大の張りをもち、胴部中央及び肩部に浅い沈線をめぐらしている。また、胴部に9個、肩部に8個の不等間隔をもった粒子状突起貼り付けをめぐらしている。頸部は細くしまり、中央部に2条の沈線をめぐらし、その上下に縦列の短線ヘラ沈線をめぐらしている。また、口縁部端部に3個の粒子状突起の貼り付けが残存するが、欠落しているものがあり、総数17～8個が推定される。聰部口縁径は9cmで、全体器高は14cmを測る。器面は全体的にヨコナデ調整が施され、坏部内面にヨコナデ調整後の仕上げナデが見受けられる。胎土に白色砂粒を少量含み、焼成は良好で、外面及び聰部口縁部内面に自然釉が付着し、オリーブ色を呈し、坏部内面は灰色を呈する。過去、宮崎県下においてこうした器形を成す器種の発見例はなく、おそらく愛知県岡崎市の岩津1号墳出土の脚付子持壷付壷に、その類例が求められるものと思われる。

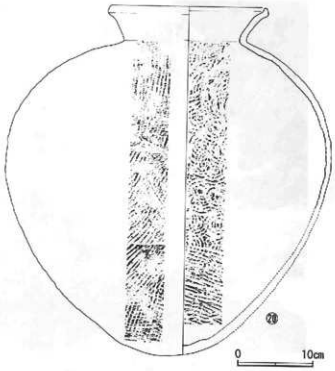
壷（⑱，⑲）

⑱は羨道部出土で、口縁部が直線的に立ち上り、肩部は大きく張り出す。口径19.1cmで器高は不明である。胎土に大小の砂粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈する。

⑲は前庭部出土で、口縁部が短く外反し、頸部がしまり、肩部が大きく張り出す。口径12.3cmで器高は不明である。口縁部内外面及び肩部にかけては、丁寧なヨコナデ調整が施され、内面は、粗いヨコナデ調整が見受けられる。胎土に細砂粒を含み、焼成は良好で灰色を呈する。

甕（第15図）（図版78）

⑳は前庭部より出土しており、おそらく破砕し、供献された甕と思われる。頸部が強く締まり、口縁部はやや外反気味に外開きで立ち上がる。口縁端部は短く屈曲して立つ。頸部から肩部にかけてゆるやかに膨らみをもち、最大膨らみは胴上部にあり、胴部から底部へは内湾気味にしぼまり、底部は丸底を成す。器厚は0.8cm内外を示し、肩部はやや厚く、胴部へと薄くなり、底部で厚みを増す。口径20.5cm、器高46.3cmで推定でき、大型の甕となる。口径部内外面はヨコナデ調整が施され、肩部から胴上部外面は縦方向のタタキが見られ、最大膨らみをもつ胴上部には、浅い条痕状のヨコナデ調整痕が見受けられる。胴下部には斜行タタキ、底部は縦、横のタタキが施され、格子目状を成す。内面は肩部に同心円文状タタキ、胴部に横方向のタタキ、底部に青海波状のタタキが施されている。胎土に細砂粒を含み、良くタタキ締められており、焼成は良好で黄灰色を呈する。



第15図　26号横穴出土遺物実測図（3）

【土師器】（⑯，⑰）

⑯は前庭部出土の盌で、平底を成す底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口径9.4cm、器高6.6cmが推定される。胎土に細砂粒を含み、焼成は良好で褐色を呈する。

⑰は玄室内出土の高坏片で、脚部他を欠く。坏部は体部から口縁部が内湾気味に立ち上がり、口唇部は薄く突がる。口径14.3cmが推定できる。脚頂部は大きく直線的に立ち上がるが、脚裾部は不明である。坏部外面はヨコ方向のヘラミガキが見受けられるが、内面は風化のため不明である。脚部外面はタテ方向のヘラミガキが見受けられる。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

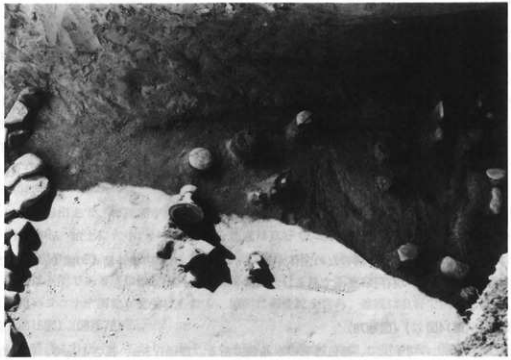
【鉄器】（第14図㉑）（図版78）

㉑は玄室内出土の鉄鏃で、銹のため全体が膨らんでいる。方頭広根斧箭式の鏃で、茎部は中空の方形断面を成す。現存長7.5cmである。

【装飾品】（第14図㉒）（図版78）

㉒は玄室内出土の切子玉で、無色透明の水晶製である。口径1.3cm、長さ1cmで、稜は磨滅して、明瞭でない。穿孔は片方からのみで、先細りとなる。

図版8　26号横穴玄室及び羨道部状況



図版9　26号横穴羨道部遺物出土状況

2．第2集団Cグループ（27，28号）

御諏訪池の西対岸にあたり、Bグループから北に離れて、丘陵東傾斜面の中腹に2基の横穴が分布する。27号は昭和44年時の調査で玄室のみが発掘調査されており、28号横穴は未調査の横穴であった。これらの横穴は、従来の里道下に羨道及び墓道をもつものであった。なお、このグループは2基のみであり、隣接して未調査の横穴が分布するのではないかと精査したが、発見するまでには至らなかった。

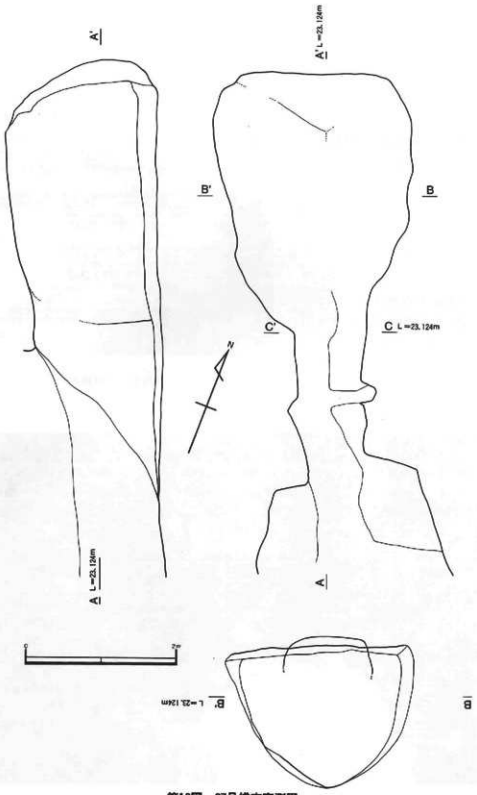
(1)　27号横穴（第16図）（図版10，11）

Bグループの26号横穴から約20ｍ北に離れて、丘陵斜面がやや内湾して御諏訪池に突き出す突端部に構築された横穴である。

図版10　27号横穴

羨道天井部及び玄室内部は崩落が著しく、床面を除いて原形をとどめていない。玄室床面の標高は、22.5ｍ内外で、主軸方向はN－20°－Wを示す。前幅2.6ｍ、奥幅1.9ｍの台形状の前庭部を削り出し、幅0.8ｍ、長さ約1ｍの墓道をもつ。羨道は床面に袖をもつ閉塞溝がわずかに残り、幅1ｍ、

図版11　27号横穴玄室天井部



第16図　27号横穴実測図

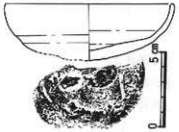
長さ1.2ｍで、やや退化現象の見られる妻入りタイプの玄室に至る。

玄室は、羨道から玄室への明瞭な袖はなく、裾広がり的な形態を成し、入口幅1.4ｍ、奥壁部幅2.1ｍ、長さ３ｍ、天井は現高で1.9ｍを測り、「寄棟造り」の構造を推定できるが、横断面から明瞭な稜線はなくなり、アーチ形への傾向が見受けられる。

27号横穴出土遺物（第17図）（図版79）

昭和44年(注)の調査では遺物の出土はなかったが、今回の調査で、羨道部埋土から、須恵器坏身１点が出土している。

丸底気味の底部から、口縁部は内湾気味に立ち上り、受け口をもたない。口径11.15㎝、器高3.75㎝で、底部はヘラ切り離しであり、窯印を有する。体部、口縁部ともに、右方向のヨコナデ調整が施されている。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈する。

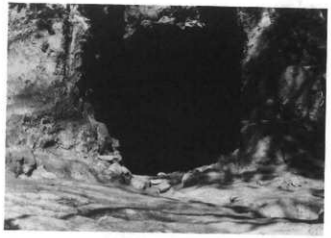


第17図　27号横穴出土遺物実測図

(2)　**28号横穴（第18図）（図版12,13,14）**

27号横穴に並列して有り、玄室と羨道部との境が崩落し、羨道及び墓道部は里道の下位となり、未調査の横穴であった。羨道玄室ともに崩落が著しく、床面のみが原形をとどめている。

玄室床面の標高は、21.6ｍ内外で、主軸方向はＮ－19°－Ｗを示す。傾斜岩盤を袖広がり状に削り出した前庭部から、幅1.1ｍ、長さ0.8ｍの墓道となる。墓道部に羨門閉塞の一部が良好な状態で残されていた。



図版12　28号横穴

羨道部前面には、幅25㎝、長さ1.4ｍ、深さ８㎝の袖をもつ閉塞溝が付設され、幅1.0ｍ、長さ0.8ｍの短い羨道から、妻入りタイプの玄室に至る。

玄室は、入口に袖をもち、入口幅1.8ｍ、奥壁部幅2.5ｍ、長さ2.9ｍで、西側壁寄りに排水溝が残る。天井は、現高で1.7ｍを測り、「寄棟造り」の構造を推定できるが、横断面からアーチ形への傾向が見受けられる。

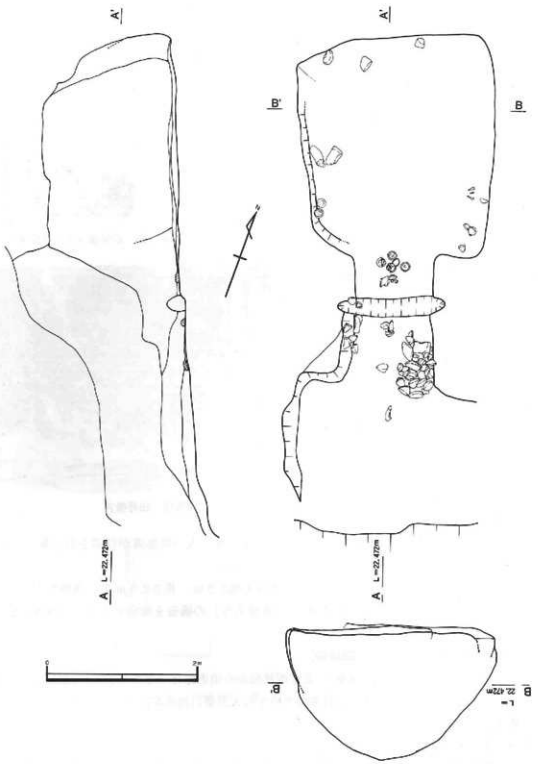
28号横穴出土遺物（第19図）（図版80）

羨道部中央から、須恵器坏（身蓋）、玄室西袖部から須恵器坏（身蓋各１点）、東袖部から鉄鏃３点が出土している。その他、前庭部埋土中から大型甕口縁部が出土している。

【須恵器】

坏身（②，⑥，⑦）

②は、羨道奥中央部出土で、底部はヘラ切り離しで、底部は内湾気味に立ち上がり、体部から口縁部にかかる部位において、あまい稜線をもって、外傾気味に立ち上がる。口径11.5㎝、



第18図　28号横穴実測図

器高3.2cmで、底部に直線的なヘラ記号を有する。体部及び口縁部は、内外面ともヨコナデ調整が施され、底部内面に仕上げナデが見受けられる。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈する。

⑥は、玄室南袖出土で、底部は丸く、体部にあまい稜線をもって屈曲し、口縁部は外傾気味に立ち上がり、口唇部がやや外反する。口径10.65cm、器高3.75cmで、底部はヘラナデ、体部及び口縁部は、内外面ともにヨコナデ調整が施され、底部内面に仕上げナデが見受けられる。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈する。

⑦は、羨道奥中央部出土で、底部はヘラケズリで、体部に屈曲をもち、口縁部へと外傾して立ち上がり、口唇部がやや外反する。口径10cm、器高3.7cmで、体部及び口縁部は内外面ともにヨコナデ調整が施され、底部内面に仕上げナデが見受けられる。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈する。

坏蓋（①，③，④，⑤）

①は、玄室南袖出土で、天井部のツマミはなく、口縁部に受け部かえりをもつ。受け部、かえりが口縁部より突出し、口径は10.1cm、受け部径12.05cm、器高2.9cmで天井部に直線的なヘラ記号を有する。体部及び口縁部の内外面はヨコナデ調整が施され、天井部外面はヘラ切り離し、内面は仕上げナデが見受けられる。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈する。

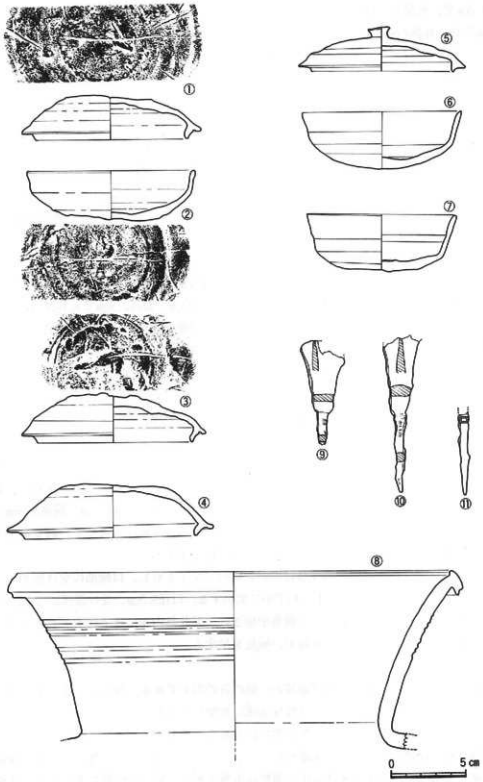
③は、羨道奥中央部出土で、天井部のツマミはなく口縁部に受け部かえりをもつ。受け部、かえりが口縁部より突出し、やや内傾する。口径10.3cm、受け部径12.3cm、器高3.1cmで、天井部に十字状のヘラ記号を有する。体部及び口縁部は、内外面ともにヨコナデ調整が施され、天井部外面はヘラ切り離し、内面は仕上げナデが見受けられる。胎土に、少量の白色砂粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈する。

④は、羨道奥中央部出土で、天井部のツマミはなく、口縁部に受け部かえりをもつ。受け部かえりが口縁部より突出し、やや内傾する。口径11.5cm、受け部径14.3cm、器高3.5cmで、体部及び口縁部にヨコナデ調整が見受けられ、天井部及び内面は風化が著しく、調整は不明である。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は不良で、白灰色を呈する。

⑤は、羨道奥中央部出土で、天井部にボタン状のツマミを有し、口縁部に受け部かえりをもつ。受け部かえりは低く、口縁部よりわずかに突出する。口径9.5cm、受け部径11.2cm、器高2.9cmで、天井部、口縁部ともにヨコナデ調整が施され、天井部内面に仕上げナデが見受けられる。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈する。

甕（⑧）

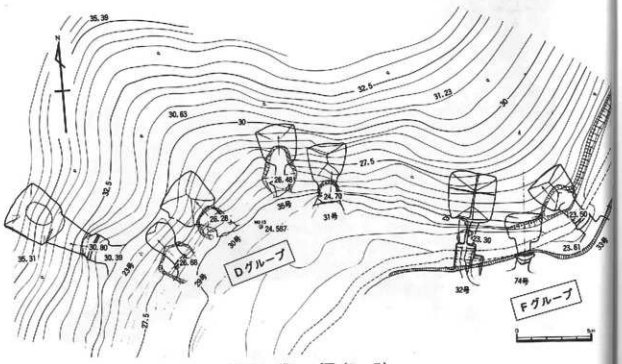
⑧は前庭部埋土より、口縁部及び頸部の一部のみの出土である。肩部が大きく張り出し、口縁部が広口となる。口縁部はわずかに外反気味に外傾して立ち上がる。口縁部端部において大きく外傾して、内面上部及び外面下部に突起状を成す。口唇部内面及び外面に凹線をもつ。また、外傾する口縁部上部に３条の沈線をめぐらしている。口径28.8cmが推定できる。外面はヨコナデ調整が施され、内面は風化気味で調整は不明である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で、灰色を呈する。



第19図　28号横穴出土遺物実測図

図版13　28号横穴玄室

図版14　28号横穴羨道部遺物出土状況



第20図　グループ図（D、F）

図版15　第２集団B、D、Eグループ全景

【鉄器】（⑨，⑩，⑪）

⑨，⑩，⑪ともに鉄鏃で玄室東袖部より出土している。⑨，⑩は、方頭広根斧箭式の鏃と思われ、⑪は茎のみである。⑨は現長6.8cmで、茎部は方形断面を成す。⑩は現長10.5cmで、茎部は方形断面を成す。⑪は茎部が中空の長方形状断面を成す。

3．第２集団Dグループ（23，29，30，31，35号）

図版16　第２集団Dグループ全景

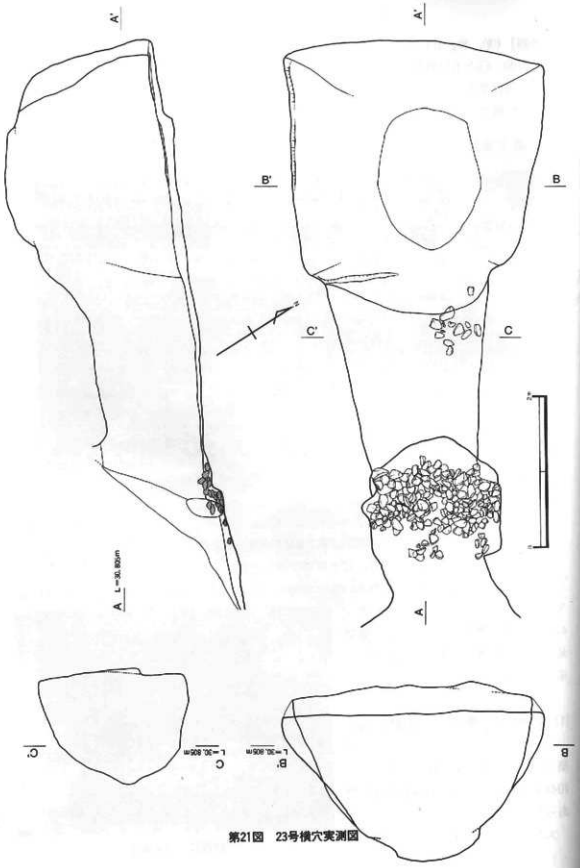
御陵訪池の西対岸にあたり、B、Cグループから北側に入り込み、Cグループの小突出した丘陵から大きく内湾して入り込む浅い谷の東側傾斜地の中腹から裾部に並列に分布する横穴群である。29～31号、35号横穴は、昭和44年時に発掘調査されているが、傾斜地中腹に１基離れてある23号横穴は、未調査であった。

図版17　23号横穴

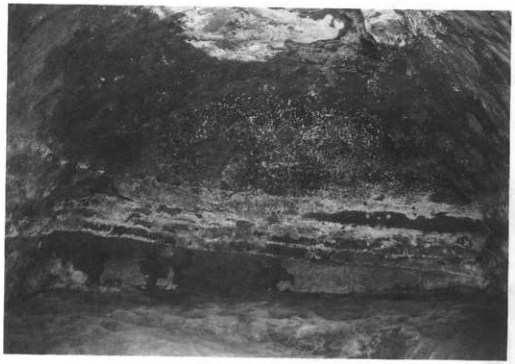
(1)　23号横穴（第21図）（図版17，18）

Dグループの中では傾斜地中腹に構築された高位置にある横穴であり、昭和44年時の調査では、未調査の横穴であった。

大型の横穴であり、玄室天井部の崩



第21図　23号横穴実測図



図版18　23号横穴玄室及び奥壁

落を除くと、良く原形をとどめている。玄室床面の標高は、30ｍ内外で、主軸方向はＮ－58°－Ｗを示す。傾斜地の中腹に構築されたこともあり、明瞭な前庭部及び墓道は確認されていないが、わずかに外開きになる前庭部が残る。

羨門部は幅1.7ｍ、長さ１ｍの長方形状に岩盤を削り出し、奥部に幅20㎝、長さ1.85ｍの袖をもつ閉塞溝をもち、その上部には閉塞石が積み上げられていた。羨道は前面部幅1.4ｍ、奥部幅2.3ｍ、長さ2.8ｍと長く、平入りタイプの玄室に至る。

玄室は、入口幅2.5ｍ、奥壁部幅3.4ｍ、長さ3.1ｍで、天井は現高で2.2ｍを測り、「寄棟造り」の構造を成すものと思われる。

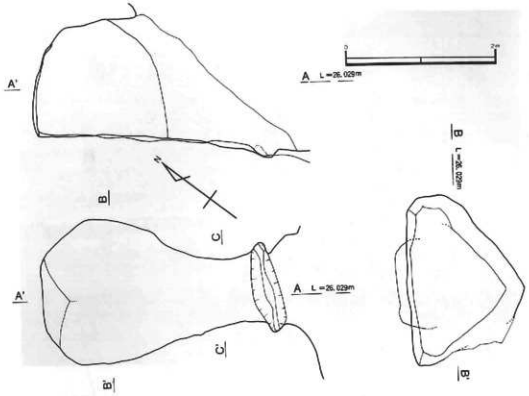
また、西側壁寄り及び玄室入口部に排水溝が残る。奥壁及び側壁に調整痕は見受けられなかった。

出土遺物は、須恵器小片数点のみであった。

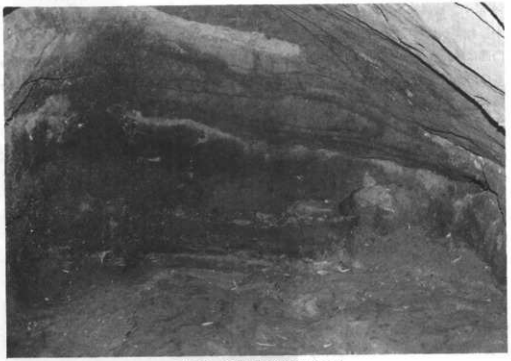
図版19　29号横穴

(2)　29号横穴（第22図）（図版19，20）

23号横穴より下段となり、小谷傾斜面の西側に位置する横穴で、昭和44年時に発掘調査が行われている。小型の



第22図　29号横穴実測図



図版20　29号横穴玄室及び奥壁

横穴で崩落が著しい。

玄室床面の標高は、25.4ｍ内外で、主軸方向はＮ－38°－Ｗを示す。顕著な前庭部及び墓道は見受けられない。

羨門部に、幅35cm、長さ1.2ｍ、深さ10cmの袖をもつ閉塞溝が残る。羨道は、幅0.8ｍ、長さ約1.2ｍで玄室に至るが、玄室入口部の袖はなく、羨道と玄室の境は不明瞭である。

玄室は中央部幅1.9ｍ、長さ約２ｍで、天井は現高で1.6ｍを測る。奥壁部断面を見るかぎり、「寄棟造り」の構造を成すものと思われるが、明瞭ではない。出土遺物はない。

(3)　30号横穴（第23図）（図版21，22）

29号横穴の北に接して開口しており、昭和44年時発掘調査が行われている。中型の横穴であり、羨道部天井及び玄室西側壁の崩落が著しい。

玄室床面の標高は25.9ｍ内外で、主軸方向はＮ－44°－Ｗを示す。羨道入口前面において岩盤が急傾斜で落ちるため、墓道及び前庭部は見られない。

羨門部の閉塞溝はなく、入口幅1.1ｍ、玄室部幅1.7ｍ、長さ1.2ｍで、玄

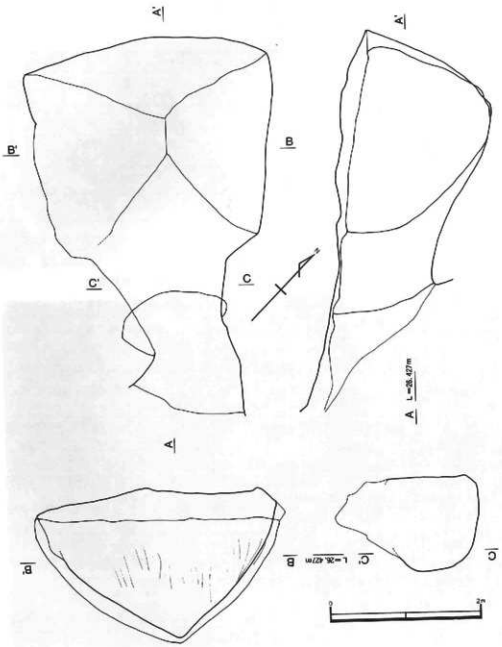
図版21　30号横穴

図版22　30号横穴玄室及び奥壁

室側に向かって次第に間口が広くなる。

玄室は、入口幅2.5ｍ、奥壁部幅3.2ｍ、長さ2.9ｍで、天井は現高で1.9ｍを測り、天井に明瞭な稜線を残す「寄棟造り」の構造を成す。

壁面の調整痕はなく、昭和44年時調査及び今回の調査でも出土遺物はない。



第23図　30号横穴実測図

(4)　31号横穴（第24図）（図版23，24）

29，30号横穴はやや東斜面に並列して開口しているが、31号横穴は湾曲して南傾斜となる傾斜裾部、35号横穴の東に接して開口している。昭和44年時に発掘調査が行われている。やや小型の横穴であり、羨道及び玄室西壁に崩落は見受けられるものの、原形を推測することはできる。

図版23　31号横穴

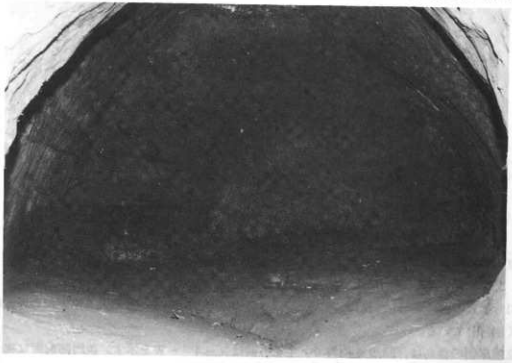
玄室床面の標高は、24.1ｍ内外で、主軸方向はＮ－７°－Ｗを示す。羨門部前面は狭く、わずかに外開きとなる墓道を残している。羨門部には、幅20cm、長さ1.3ｍ、深さ10cmの閉塞溝が見られ、閉塞石は残存していない。羨道は、幅1.3ｍ、長さ1.1ｍの長方形状の床面をもち、妻入りタイプの玄室に至る。

玄室は、入口幅1.7ｍ、奥壁部幅2.6ｍ、長さ2.4ｍのやや台形状の床面を呈し、天井は、現高で1.7ｍを測り、「寄棟造り」の構造を成す。

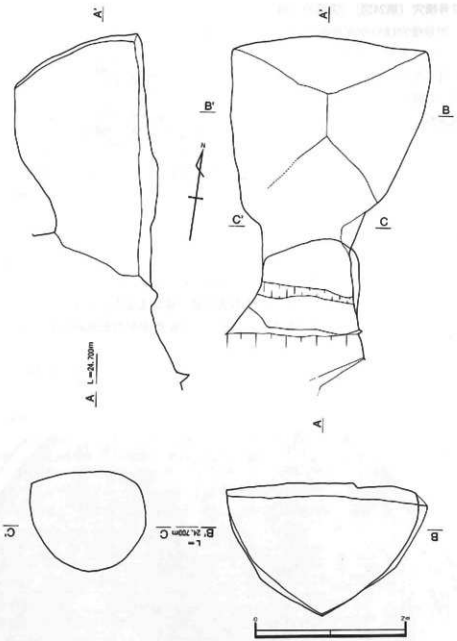
床面及び側壁に後世の掘り込みが見受けられ、壁面の調整痕は見受けられない。

31号横穴出土遺物

今回の調査では、遺物の出土はなかったが、昭和44年時調査(注)により、須恵器が出土して



図版24　31号横穴玄室



第24図　31号横穴実測図

おり、かえりをもつ坏蓋、高台付坏、坏身及び甕の肩部片が見られる。

(5)　35号横穴（第25図）（図版25，26）

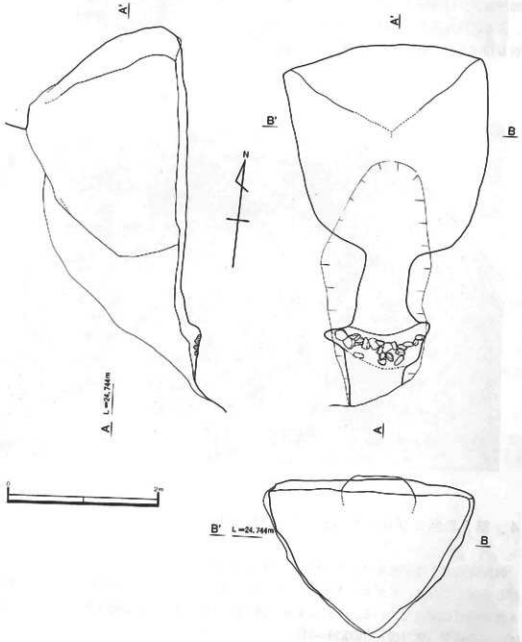
31号横穴の西に並列して開口している。やや小型の横穴であり、羨道及び玄室部の天井は著しく崩落している。

玄室床面の標高は、23.9ｍ内外で、主軸方向はＮ－４°－Ｗを示す。羨門部前面は狭く、岩盤が急傾斜で落ちるため、わずかな墓道を残している。羨門部には、羨道からの段差をもち、

袖をもつ閉塞溝が見受けられ、閉塞石が残る。羨道部は、幅0.6ｍ、長さ1.1ｍの細長い床面を成し、側壁上部及び天井部は完全に崩落している。

玄室は、入口幅1.5ｍ、奥壁部幅2.6ｍ、長さ2.7ｍの丸みをもつ台形状の床面を呈し、天井は崩落しており、現高で2.1ｍを測り、「寄棟造り」の構造が推定できる。

壁面の調整痕は見受けられない。



第25図　35号横穴実測図

35号横穴出土遺物

今回の調査では出土遺物はなかったが、昭和44年時調査(注)では、須恵器、土師器、鉄器が出土している。須恵器は、甕体部片、瓶類体部片、壷の口縁部及び頸部片、短頸壷の肩部片がある。土師器は、坏口縁部２点がある。鉄器は、方頭広根斧箭式の鉄鏃、頭部先端が折り曲げられた釘状の鉄製品である。

図版25　35号横穴

図版26　35号横穴玄室及び奥壁

4．第２集団Ｅグループ（36，37，38，39号）

御諏訪池の西対岸東傾斜面の中腹に、丘陵突端部南側から第２集団のＢグループ、Ｃグループと分布しており、ＥグループはＣグループの上部、丘陵頂部近くにグループをなすもので、４基が並列に開口している。これら４基の横穴は、昭和44年時に発掘調査が行われている。

(1)　36号横穴（第26図）（図版28～31）

４基並列に南側端に開口する横穴である。大型の横穴であり、羨道部の一部が崩落している

図版27　第２集団Ｅグループ全景

ものの、原形を良くとどめており、玄室内部もしっかりしている。

玄室床面の標高は、30.9ｍ内外で、主軸方向はＮ－46°－Ｗを示す。丘陵頂部からの急傾斜面に横穴を構築しており、横穴床面となる標高位置は緩傾斜地となり、墓道及び前庭部の削り出しが窺われる。

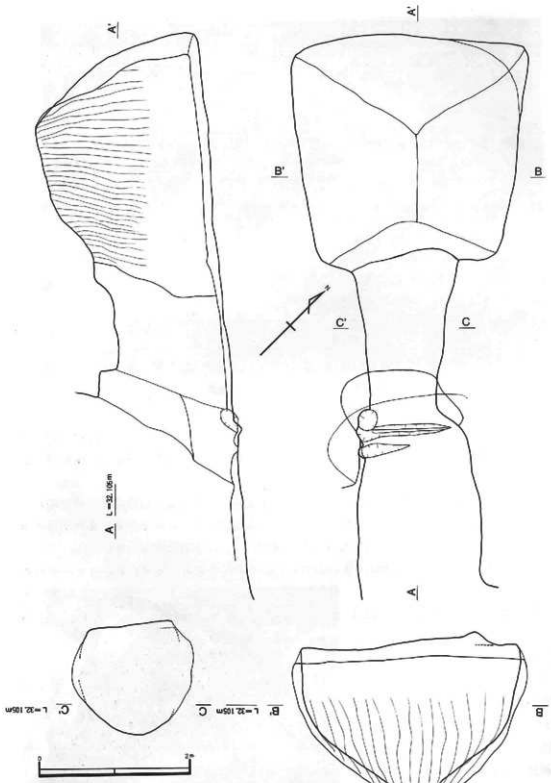
顕著な前庭部は見受けられないが、小範囲の平坦面を残す。墓道は、前庭部との境を明らかにすることはできないが、幅1.6ｍ、長さ２ｍの墓道を確認することができる。羨門部は羨道部床面から段差をもち、西側壁に袖をもった閉塞溝が残り、閉塞石は残存しない。

羨道は入口幅0.9ｍ、玄室部幅1.4ｍ、長さ1.7ｍの床面をもち、高さ1.4ｍのアーチ形を成す。

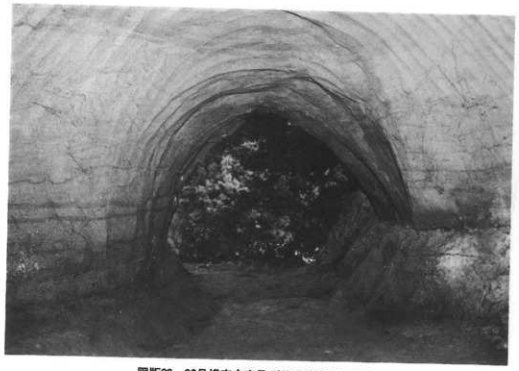
玄室は、妻入りタイプで、入口幅2.3ｍ、奥壁部幅3.1ｍ、長さ３ｍで、天井は現高で2.2ｍを測り、棟稜線を良く残した「寄棟造り」構造である。

側壁及び奥壁に整然とした調整痕が施され、側壁は幅約10cmで、奥壁はやや幅広で、15cmの縦列調整痕である。蓮ヶ池横穴群の中で最も良く調整され、また残存している横穴である。

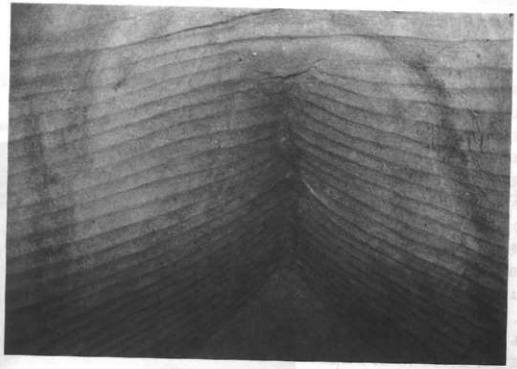
図版28　36号横穴



第26図　36号横穴実測図



図版29　36号横穴玄室及び羨道部調整痕状況



図版30　36号横穴天井部調整痕状況

図版31　36号横穴玄室床面

36号横穴出土遺物

今回の調査では出土遺物はなかったが、昭和44年時調査(注)で土師器６点が出土している。土師器は、坏口縁部片、甕口縁部片、坏底部片、高台付坏片が出土している。

(2)　37号横穴（第27図）（図版32，33）

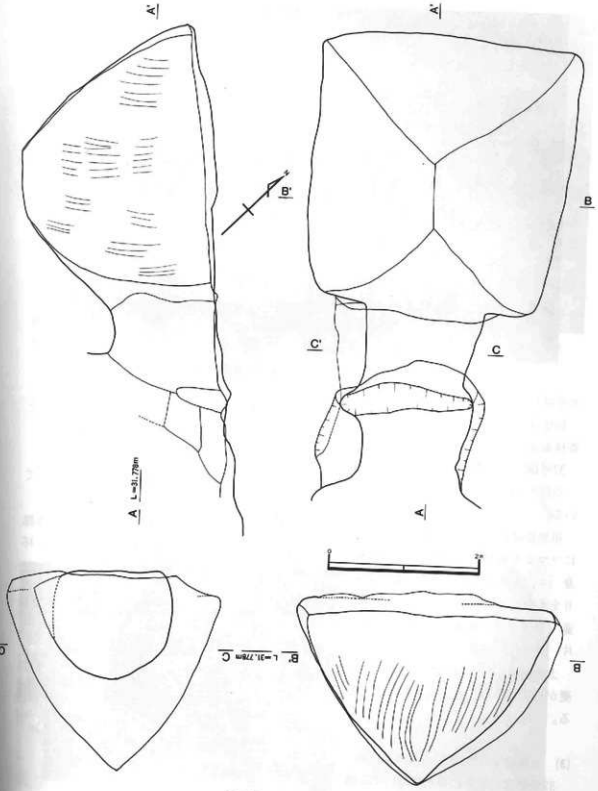
36号横穴の北側に接して開口する横穴である。大型の横穴で、羨道部西側壁に崩落が見受けられるものの、良く原形をとどめており、玄室内部もしっかりしている。

玄室床面の標高は、30.9ｍ内外で、主軸方向はＮ－45°－Ｗを示す。36号横穴同様、前庭部は小範囲の平坦面を残し、墓道は羨道床面から段差をもって、幅1.3ｍ、長さ１ｍの床面をもち、傾斜岩盤を削り出している。

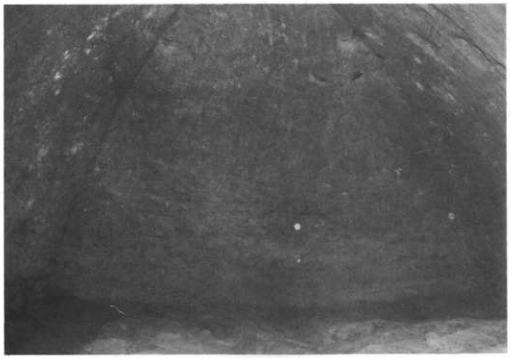
羨門部には幅35㎝、長さ175㎝、深さ10㎝の袖をもつ閉塞溝があり、閉塞石は残存しない。羨道は、入口幅1.4ｍ、玄室部幅1.6ｍ、長さ１ｍの床面をもち、高さ1.4ｍのアーチ形を成す。

玄室は、妻入りタイプで、入口幅2.7ｍ、奥壁部幅3.3ｍ、長さ3.6ｍで、

図版32　37号横穴



第27図　37号横穴実測図



図版33　37号横穴玄室及び奥壁

天井は現高で2.5ｍを測り、棟稜線を良く残した「寄棟造り」構造である。

側壁及び奥壁に細い縦列の調整痕が残る。また、玄室入口部の内壁面には、羨道部アーチと寄棟妻部の稜線を明確に造り出している。

37号横穴出土遺物

今回の調査では出土遺物はなかったが、昭和44年時調査(注)で須恵器及び土師器を出土している。

須恵器は坏蓋（a，かえり及び天井部にツマミを有しないもの　b，かえりをもち、天井部にツマミを有しないもの　c，天井部にツマミを有し、かえりをもたないものがある。）、坏身（a，かえりをもつもの　b，かえりをもたないものとがある。）、高坏、壺（口縁部片、底部片）、甕（口縁部片、体部片）が見受けられる。

土師器は、坏（口縁部片、底部片）、甕が見受けられ、甕底部は木葉底である。

図版34　38号横穴

(3)　38号横穴（第28図）（図版34～36）

37号横穴の北側に接して開口する横穴である。大型の横穴で、羨道部の一部崩落、羨道床面に後世に掘り込まれた円形坑を除いて、原形を良くとどめている。

玄室床面の標高は、30.6ｍ内外で、主軸方向はN－25°－Wを示す。前庭部は小範囲の平坦面を残し、墓道は羨道床面からわずかな段差をもって、幅1ｍ、長さ1.2ｍの床面をもち、傾斜岩盤を削り出している。

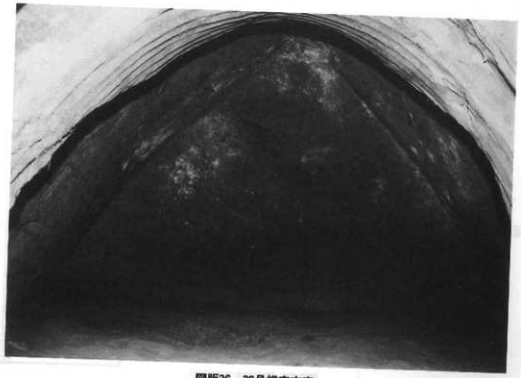
羨門部は、袖をもつ閉塞溝が残るが明瞭ではなく、閉塞石も残存しない。羨道は、入口幅1.1ｍ、玄室部幅1.6ｍ、長さ1.4ｍの床面をもち、高さ1.5ｍのアーチ形を成す。

玄室は、妻入りタイプで、入口幅2.7ｍ、奥壁部幅3.8ｍ、長さ3.1ｍで、天井は現高で2.35ｍを測り、棟稜線を良く残した「寄棟造り」構造である。

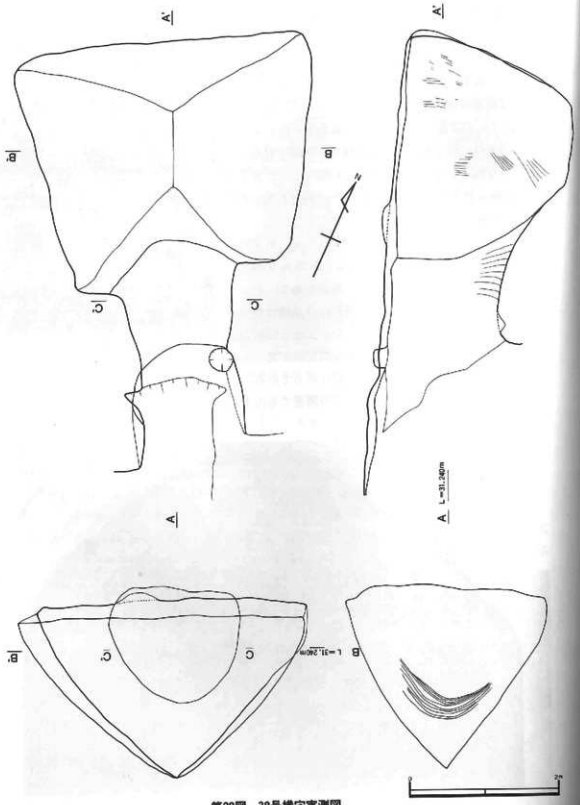
側壁には調整痕は見られず、側壁には規律性のない細線の調整痕が見受けられる。また、玄室入口部の内壁面には、羨道部アーチに重弧する調整痕が見られるとともに、寄棟部の稜線を明確に造り出している。

遺物は、昭和44年時調査及び今回の調査でも出土していない。

図版35　38号横穴玄室及び羨道部



図版36　38号横穴玄室



第28図　38号横穴実測図

(4)　39号横穴（第29図）（図版37，38）

Eグループ4基のうち北側端に開口する横穴である。同グループ3基の横穴に比較するとやや小型の横穴であるが、羨道部及び玄室天井部の一部の崩落を除いて、原形をとどめており、構造もしっかりしている。

図版37　39号横穴

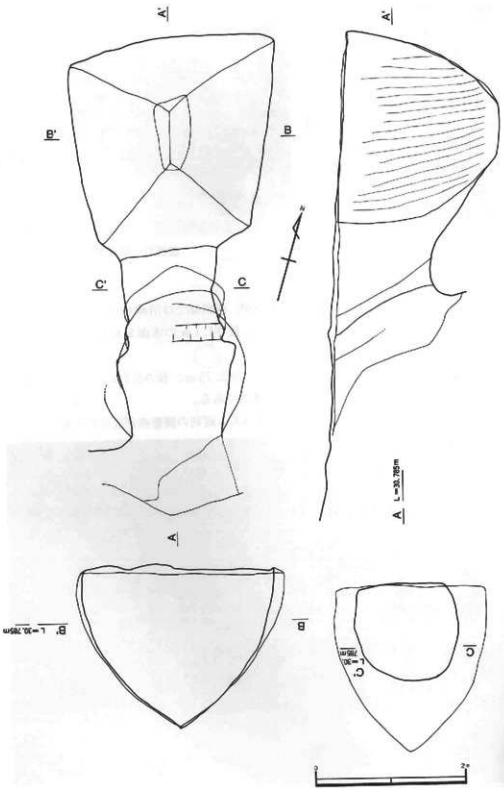
玄室床面の標高は、30ｍ内外を示し、主軸方向はＮ－17°－Ｗを示す。前庭部は小範囲の平坦面を残し、墓道は幅1.3ｍ、長さ1.3ｍの床面をもち、傾斜岩盤を削り出し、閉塞溝と画している。

羨門部は幅25cmでわずかに凹む閉塞溝をもつが、西側部では消滅している。閉塞石は残存しない。羨道は、入口幅1.2ｍ、玄室部幅1.3ｍ、長さ1.1ｍの床面をもち、高さ1.3ｍのアーチ形を成す。

玄室は、妻入りタイプで、入口幅２ｍ、奥壁部幅2.75ｍ、長さ2.7ｍで、天井は現高で2.1ｍを測り、棟稜線を良く残した「寄棟造り」構造である。

奥壁には調整痕は見られず、側壁には規律性のある縦列の調整痕が見受けられる。また、玄

図版38　39号横穴玄室



第29図　39号横穴実測図

室入口部の内壁面には、寄棟部の稜線を明確に造り出している。

なお、この横穴は他の3基に比較して、寄棟稜線に膨らみをもち、鈍角傾向にある。

39号横穴出土遺物

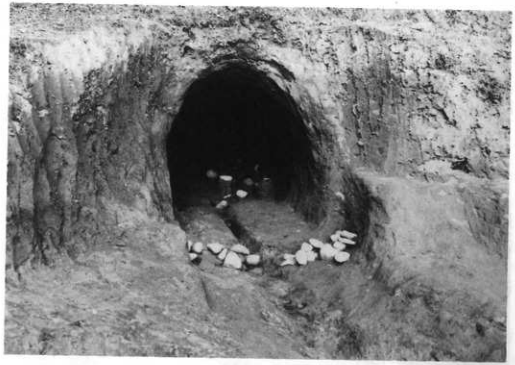
今回の調査では出土遺物はなかったが、昭和44年時調査(注)で須恵器が出土しており、須恵器は甕体部片のみであった。

5．第2集団Fグループ（32，33，74，76号）

御諏訪池の西対岸、Eグループが分布し、湾曲して入り込む小谷の東側となり、傾斜面が南側傾斜に変わる位置に分布する横穴群である。傾斜地裾部に東側から、32，74号そしてゆるやかな丘陵突端部からやや南東傾斜面に変わる位置に、33号が分布する。これら3基の横穴は丘陵裾部に位置し、御諏訪池が満水状態になると完全に水没状態となる。

また、これらの横穴の上部に離れて、新たな横穴の発見があったため、76号横穴としてFグループの範疇でとらえることとした。なお、76号横穴については、発掘調査を行わなかった。

(1)　32号横穴（第30図）（図版39～41）



図版39　32号横穴

Fグループの西側端に位置する横穴で、羨道入口部が陥没して開口したもので、羨道上部に里道が通り、昭和44年時では未調査横穴であった。御諏訪池築堤前から開口していたものと思われ、羨道前面に杭列が残り、築堤時に二次的閉塞が行われたものと思われる。

玄室床面の標高は、21.8ｍ内外で、主軸方向はＮ－12°－Ｅを示す。前庭部は丘陵裾部において、緩傾斜となる岩盤を方形状に削り出しており、中央部に浅い、Ｕ字溝的な墓道が共合し、更に中央部に幅30㎝、深さ15㎝の排水溝が付設されている。

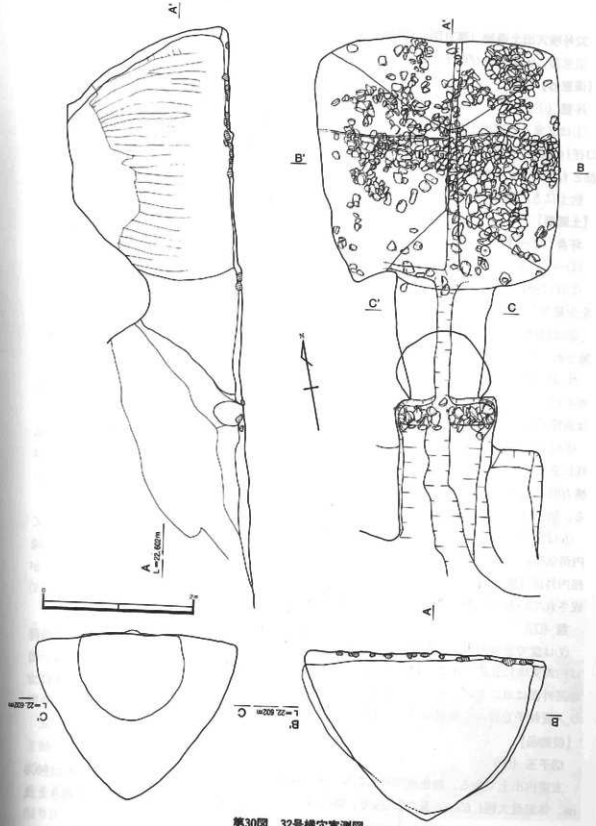
図版40　32号横穴墓道及び羨道部

羨門部は袖をもつ幅30㎝、長さ1.3ｍ、深さ10㎝の閉塞を有し、下部に閉塞石が残存する。羨道は前面部幅0.9ｍ、奥部幅1.3ｍの台形状の床面を成し、中央部に幅20㎝、深さ10㎝の排水溝が延び、玄室入口において、玄室両袖部に岐れて延びるものと、さらに、玄室中央部に延びる十字溝を成す。羨道天井高は1.1ｍで、低いアーチ形を成す。

玄室は妻入りタイプで、入口幅2.6ｍ、奥壁部幅３ｍ、長さ3.1ｍのほぼ方形状の床面を呈し、天井は現高で2.1ｍを測り，棟稜線を良く残した「寄棟造り」構造である。

天井部及び天井部からの側壁に薄い剝落は見受けられるものの、良く原形をとどめている横穴である。玄室床面は川原石を敷きつめた礫床となり、玄室奥部において、奥壁より1.3ｍ、玄室中央部に寄った位置に高さ５㎝の段をもつ屍床を付設している。

図版41　32号横穴玄室内礫床状況



第30図　32号横穴実測図

32号横穴出土遺物（第31図）（図版81）

須恵器、土師器及び切子玉が出土している。

【須恵器】

坏蓋（①）

①は玄室入口部出土で、天井部に宝珠ツマミを有し、口縁部内側に低い突起のかえりをもつ。口径14.7㎝、受け部径12.4㎝、器高4.1㎝で、かえりは口縁部より突出しない。天井部、口縁部ともにヨコナデ調整が施され、天井部内側は仕上げナデが見受けられる。

胎土にきめ細かい砂粒を含み、焼成は良好で、外面は黒灰色、内面は淡灰色を呈する。

【土師器】

坏身（②～⑥）

②～④は玄室内出土で、底部は丸く、体部から口縁部は内湾気味に立ち上がる。

②は口径12.25㎝、器高3.8㎝で、外面はヨコナデ、内面はナデ調整が施され、胎土に小砂粒を少量含み、焼成は良好で、黄褐色を呈する。

③は口径約11.6㎝、器高4.3㎝で、外面は風化が著しく調整不明、内面は丁寧なナデ調整が施され、胎土に赤褐色の砂粒を少量含み、焼成は良好で黄褐色を呈する。

④は口径約11.1㎝、器高3.3㎝で、外面体部は風化して調整不明、口縁部は横方向のヘラミガキが見受けられる。内面は丁寧なヘラミガキが施されている。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

⑤は玄室内出土で、底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部に至って屈曲して内傾気味に立ち上り、口唇部が肥厚する。口径約11.55㎝、器高4.2㎝で、体部及び口縁部の内外面は横方向回転によるヘラミガキが施され、底部は内外面ともに直線的なヘラミガキが施されている。胎土はきめ細かく、焼成は良好で赤褐色を呈する。

⑥は玄室内出土で、やや大型の坏で器厚も厚くなる。底部は丸く、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口唇部は薄く、突がり気味となる。口径約15.7㎝、器高6.1㎝で口縁部内外面は横方向のヘラミガキ、底部は粗いヨコナデ調整が施され、底部内面はヘラミガキが成されている。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

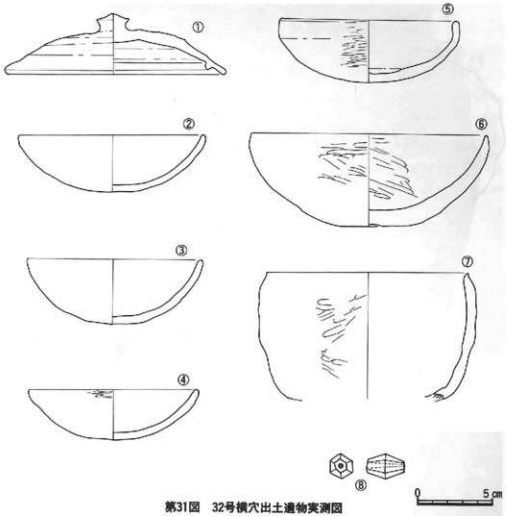
壺（⑦）

⑦は壺で玄室内出土である。底部を欠くが、底部から体部へは屈曲して立ち上がり、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口唇部はやや外反し突がる。口径13.4㎝、器高は現高で8.4㎝、口縁部外面はヨコナデ、体部外面及び内面は横方向のヘラミガキ調整が施されている。胎土にガラス質粒子を含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

【装飾品】

切子玉（⑧）

玄室内出土である。無色透明の水晶製で断面は６角形を成し、稜は良く残る。口径最大径0.9㎝、体部最大径1.65㎝、長さ2.5㎝で、穿孔は、入口部径0.4㎝、出口部径0.12㎝と先細りと成る。



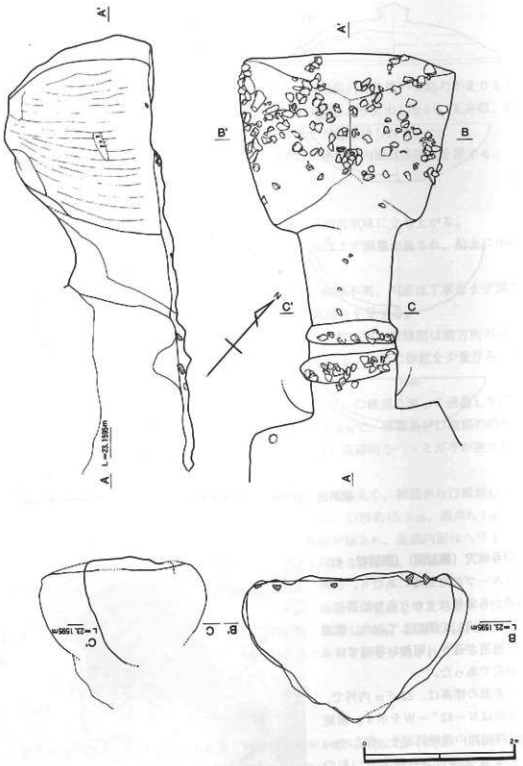
第31図　32号横穴出土遺物実測図

(2)　33号横穴（第32図）（図版42，43）

Ｆグループの東側端にあたり、丘陵突端部から北側にまわり込む位置に、羨道部が陥没して開口しており、羨道上部に里道が通り、昭和44年時では未調査横穴であった。

玄室床面の標高は、22.6ｍ内外で、主軸方向はＮ－42°－Ｗを示す。前庭部は丘陵裾部の緩傾斜面を、幅2.8ｍ、長さ約１ｍを墓道から袖をもつ形で削り出している。

図版42　33号横穴全景



第32図　33号横穴実測図

図版43　33号横穴玄室

図版44　33号横穴線刻画（玄室西側壁面）

墓道は幅1.1ｍ、長さ0.5ｍと短い。羨門部は袖をもつ幅35㎝、長さ1.3ｍ、深さ８㎝と15㎝離れて同じく幅30㎝、長さ1.2ｍ、深さ10㎝の閉塞溝をもち、羨道部床面と段差をもつ。閉塞溝には下部閉塞石が残存している。

羨道部は前面部幅1.05ｍ、奥部幅1.4ｍ、長さ1.8ｍの床面を成し、天井部及び東壁部は崩落している。天井部現高1.3ｍを測る。

玄室は妻入りタイプで、入口幅1.9ｍ、奥壁部幅2.8ｍ、長さ2.3ｍの台形状の床面を呈し、天井部は崩落し、天井は現高で1.9ｍを測り、「寄棟造り」構造を成す。

玄室床面に川原石の散乱があるが、一部ではしっかりしているところもあるため、礫床があったものと思われる。

33号横穴線刻画（図版44）

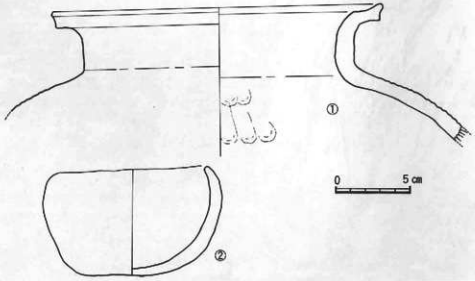
この横穴は、御諏訪池の池水下に床面をもつものであり、羨道部上面に径約30㎝の陥没坑があり、従来から知られていた横穴であった。

今回の調査で、玄室西側壁面に線刻画が見受けられた。線刻画は、西側壁、中央部、床面より約60㎝上がった位置にあり、鍬状工具による壁面調整痕に画されたなかに線刻されている。画は、三体並列、人物像の顔面及び体部を描いており、上肢、下肢は不明である。風化が著しく、顔面様相については判然としないが、中央部一体は円弧の顔面に、目及び口を丸く描いている感じがする。こうした線刻画は、宮崎市指定史跡、広原横穴１号の線刻画に非常に類似するものである。

33号横穴出土遺物（第33図）（図版82）

【須恵器】

甕（①）



第33図　33号横穴出土遺物実測図

羨道部からの出土で、口縁部から体部片である。口縁部は大きく外反し、外反した内部にわずかに窪みが見受けられる。また、外面となる口唇部にもゆるやかな窪みが見られ、頸部は直線的に立ち上がってしぼまる。頸部から肩部はあまい稜線をもって張り出し、肩部に最大の張りが見受けられるものである。口径22㎝、頸部径16.8㎝が推定できる。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整、肩部に至って外面に縦横のタタキが見られ、内面は縦方向の指ナデが見受けられる。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で灰色を呈する。

【土師器】

鉢（②）

前庭部、西袖部の出土である。底部はやや平底を成し、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに内傾し、口唇部は突がる。口径10㎝、器高７㎝で、前面が風化しており、調整は不明である。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で、黄褐色を呈する。

(3)　74号横穴（第34図）（図版45，46）

32号と33号に挟まれた中央に位置し、御諏訪池の水を落とした際に、岩層盤面に前庭部の削り出しが露出し、確認された横穴である。羨道部、玄室部の天井部は完全に崩落しており、床面及び奥壁面を残すのみであった。

玄室床面の標高は、20.8ｍ内外で、主軸方向は真北方向を示す。

前庭部はわずかな岩盤を削り出した程度で、顕著には残っていない。墓道は、幅１ｍ、長さ0.7ｍと短い。

図版45　74号横穴

羨道部は袖をもつ幅35㎝、長さ1.38ｍ、羨道部床面から段差をもって、深さ20㎝の閉塞溝を有し、下部に閉塞石が残存する。羨道は前面部幅0.85ｍ、奥部幅１ｍ、長さ１ｍの床面を成す。

玄室は入口幅1.8ｍ、奥壁部幅2.4ｍ、長さ1.8ｍで、やや平入りタイプを示す。天井は崩落しており、奥部において現高で1.8ｍを測り、構造は「寄棟造り」が推定できる。

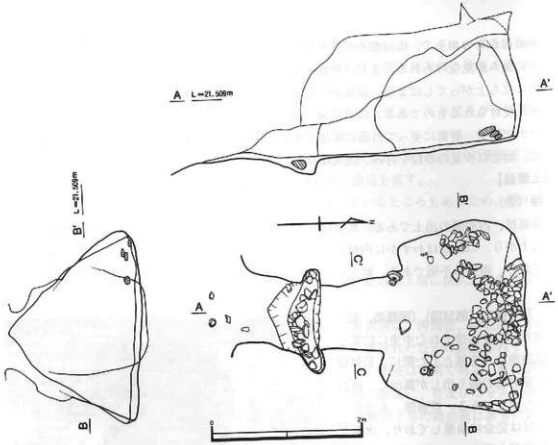
玄室内に川原石を散乱しているが、礫床をもったものか、閉塞石の流れ込みなのか判断はつきかねる。

74号横穴出土遺物（第35図）（図版83）

須恵器及び土師器が出土している。

【須恵器】

坏蓋（①，②）



第34図　74号横穴実測図

図版46　74号横穴玄室床面

①は玄室内出土で、天井部にやや大型の宝珠ツマミを有し、口縁部に受け部のかえりをもたないが、口唇部が直に立つ。口径15.1cm、器高2.65cmで、表面の風化が著しく、調整痕は判然としないが、ヨコナデ調整がわずかに見受けられる。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は不良で、灰白色を呈する。

②は玄室内出土で、天井部に小型で突がった宝珠をもつ。口縁部に受け部のかえりをもち、かえりは口縁部より突出しない。口径9.1cm、受け部径7.6cmで、全体的にヨコナデ調整が施され、内面天井部に仕上げナデが見受けられる。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈する。

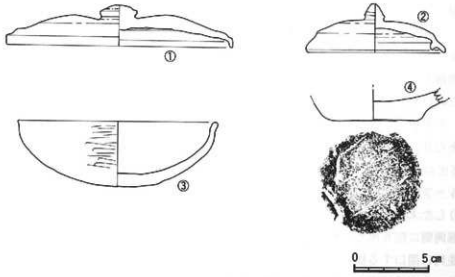
【土師器】

坏身（③）

③は玄室内埋土中よりの出土で、底部は丸底を成し、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口唇部は外反気味となる。口径13.25cm、器高4.3cmで、口縁部外面及び体部に横方向のヘラミガキ調整が確認できるが、他は風化のため不明である。胎土に細砂粒の他ガラス状粒子を少量含み、焼成は良好で、黄褐色を呈する。

甕（④）

④は前庭部出土で、甕底部となるものと思われ、木葉底を成す。胎土に細砂粒を含み、焼成は良好で黄褐色を呈する。



第35図　74号横穴出土遺物実測図

第Ⅳ章　結　　語

本年度の横穴計測調査は、御諏訪池対岸に史跡地の管理、活用のための園路設置計画をもち、御諏訪池の西対岸斜面には横穴が分布しているため、横穴に棄損を与えないように、御諏訪池用地を新たに買収して張り出す形での設置となった。こうしたことから、工事着手前に横穴の規模、範囲を確認するための発掘調査を実施した。大半の横穴は、昭和44年の緊急発掘調査時に調査が行われているが、当時、里道にかかる横穴及び、池水下に埋没する横穴については、調査が見送られており、今回は、こうした横穴を含めての再調査を実施した。

なお、調査中に、32号横穴上部に離れて1基（76号）、24号横穴の南に隣接して1基（77号）の2基が新しく発見されたが、今回の調査では発掘調査を見送った。

今回新たに発掘調査を実施した横穴は、26号、28号、23号、32号、74号、33号の6基を数え、特に、26号、32号には、出土遺物や構造に特徴が見受けられた。

構　造

(1)　Bグループの横穴は、24号、25号ともに玄室は小型の類に属し、平入りタイプを呈するのに対し、26号横穴はやや方形状を成し、妻入りタイプを呈する。なお、いずれの横穴も羨道部が比較的長く、閉塞溝が24号、25号には二重、26号は一重の付設となる。玄室横断面は、天井頂部角度に鋭角を残すが、側壁部にかかる部位については、やや丸みを増す傾向となる。

なお、Bグループの中では26号横穴が主たる位置にあったものと思われる。蓮ヶ池横穴群構築時期の中では、盛行期か、やや前半期にあたるものと思われる。

(2)　Cグループの横穴は、27号、28号の2基のみで、いずれも中型の横穴を成す。28号は玄室入口部に両袖をもち、しっかりした長方形状の床面をもつが、27号は袖が明瞭でなくなり、奥部からしだいに羨道部へしぼまる形態を呈する。玄室横断面は、両基ともに天井頂部角度が鈍角となり、ややドーム状化の傾向が見受けられ、蓮ヶ池横穴群構築時期では28号横穴が先行し、盛行期にあたり、27号横穴はやや時期が下るものと思われる。

(3)　Dグループの横穴は、23号横穴のみがグループの南西方向に離れて、上段に位置し、構造もしっかりした大型の横穴である。特に、羨道が大きく長いこと、羨道部閉塞溝の付設とともに、羨門部両側に削り出した幅広の袖をもつなど、特徴が見受けられる。

下段に並列に開口する横穴は、比較的構造が小さく、玄室床面、入口部袖の作り出しが明瞭でなくなり、玄室横断面から天井頂部角度が鈍角気味となり、全体的に構造の退化傾向が見受けられる。

蓮ヶ池横穴群構築時期からすると、盛行期か、やや下る時期に23号横穴が先行して構築され、その後に29号～31号、35号横穴が構築されたものと思われる。

(4)　Eグループの横穴は、丘陵頂部近くに並列に構築された横穴であり、構造的には大型で、特に天井高が2ｍを越し、天井部稜線も明瞭で、天井頂部角度が鋭角を成すなど、蓮ヶ池横穴の中では、初期段階で構築されたものと思われる。なかでも36号横穴は、両側面、奥壁部に鍬状工具による仕上げ調整痕を明瞭に残しており、グループの中でも先行する横穴と思われる。

(5)　Fグループの横穴は、第2集団横穴の中でも床面標高が低い位置に構築され、御諏訪池が満水状態になると水没する横穴であった。

32号横穴は大型に属するが、33号、74号はやや小型の横穴に属するものと思われる。32号は、玄室が方形状を呈し、床面に礫を敷きつめた礫床をもち、奥部はベッド状の台をもち、羨道は細長く、閉塞溝の袖をもち、中央部に排水溝を付設するとともに、玄室壁画には鍬状工具による調整痕をもつなど、蓮ヶ池横穴群構築時期では、早い時期に構築されたものと思われる。33号、74号横穴は、形態自体は小型化となるが、構造には類似性が見られ、23号横穴に後続する形で構築されたものと思われる。

遺　物

今回の発掘調査で新たに発掘した横穴のうち、26号、27号、28号、32号、33号、74号から遺物が検出され、特に、26号及び28号横穴から多くの遺物を出土している。中でも、26号横穴出土の聴形蓋は、出土例を見ない器形をしており、身となる器体の出土がないため、名称についても苦慮したところである。また、同じく26号から、高坏の坏口縁部に数個のミニチュア壺を装飾的に貼り付けた須恵器が出土しており、蓮ヶ池横穴群の出土遺物に新例の資料を提供することとなった。

以下、各横穴ごとに、須恵器編年によって時代想定を行ってみた。

(1)　23号横穴からは出土遺物なし。

(2)　24号横穴

44年時調査により、須恵器、土師器(注)、鉄器、装身具等を出土しており、須恵器(注)に短頸壺の蓋となるものとボタン状ツマミを有する坏蓋があり、須恵器編年からすると、前者がⅣａの時期、後者がⅦの時期に比定され、やや時代幅をもつ出土遺物となっている。

(3)　25号横穴

44年時調査により、須恵器の出土があり、中でも聽(注)の口縁部が見られる。口縁部下に浅い沈線をもち、頸部から口縁部が屈曲して外開きとなる形態を呈し、須恵器編年からⅣ時期に相当するものと思われる。

(4)　26号横穴

未調査の横穴で、今回の調査で多数の遺物を出土している。須恵器から坏身、坏蓋（第13図②，⑥，⑦）にⅣb時期が見受けられ、また、Ⅴ時期相当の坏身、坏蓋（第13図①，③，④，⑧）とボタン状ツマミを有する坏蓋（第13図⑨，⑩）は、Ⅶ期に相当するものであり、須恵器からは相当時間差が窺われる。しかし、特殊器形をした。鴟形蓋及び装飾小蓋付き高坏等は、Ⅳb～Ⅴ期相当の須恵器と思われ、26号横穴の構築時期はこの時期に比定したい。なお、Ⅶ期相当のボタン状ツマミを有する坏蓋は、前庭部の埋土中よりの出土であり、後世に何らかの形で供献されたものではないかと思われる。

(5) 27号横穴

44年時の調査では遺物の出土はないが、今回の調査により須恵器坏身が1点出土しており、須恵器編年からはⅤ期に相当するものと思われる。

(6) 28号横穴

未調査の横穴で、今回の調査で須恵器及び鉄鏃を出土している。須恵器の坏身、坏蓋を見るとき、Ⅲb～Ⅳa時期に相当するものが多い。中には、坏身にⅤ期に相当すると思われるものも見受けられる。

(7) 29号、30号横穴からは出土遺物なし。

(8) 31号横穴

44年時の調査で須恵器(注)が出土しており、坏蓋にⅥ期に相当するものが見受けられる。

(9) 32号横穴

未調査の横穴で、今回の調査で須恵器1点と切子玉、その他は土師器坏が主体を占めていた。須恵器は、天井部に宝珠形のツマミを有した坏蓋が出土しており、須恵器編年では、Ⅵ期に相当するものであった。一方、土師器も同時期のものが大半を占めていた。

(10) 33号横穴

未調査の横穴で、出土遺物は少なく、玄室から甕片及び前庭部袖から土師器盌が出土している。須恵器は大型の甕口縁であり、Ⅴ期に相当するものと思われる。

(11) 35号横穴

44年時の調査で須恵器、甕、短頸壺、土師器及び鉄鏃が出土しており、短頸壺片から、Ⅳa～Ⅴ期の時期が想定される。

(12) 36号横穴

44年時の調査では須恵器の出土はなく、土師器が主体であった。土師器に高台付き坏が見受けられ、7世紀代が想定される。

(13) 37号横穴

44年時の調査で須恵器、土師器を多く出土している。須恵器の大半は須恵器編年のⅤ期を中心としたものであるが、中には、ボタン状ツマミを有する、Ⅶ期に想定される坏蓋が出土しており、やや時間差をもつ出土遺物となっている。

(14) 38号横穴からは出土遺物なし。

(15) 39号横穴

44年時の調査で須恵器、甕の体部片が出土しているのみで、時期想定は困難である。

(16) 74号横穴

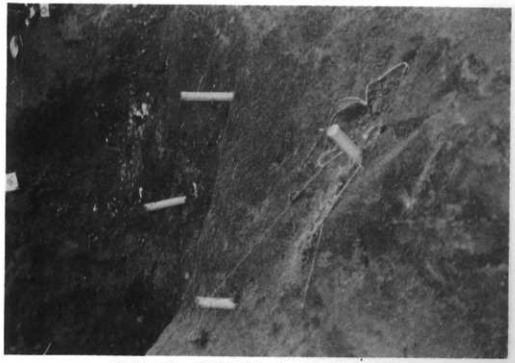
未調査の横穴で、今回の調査で須恵器及び土師器が出土しており、中でも、土師器甕の底部と思われるものに木の葉底が見受けられた。須恵器は坏蓋2点があり、天井部に宝珠状のツマミを有するもので、（第35図②）はⅤ期、（第35図①）はⅥに想定されるものと思われる。

以上のごとく、第2集団における横穴群では、須恵器編年から見るかぎりⅣa期からⅦ期に相当するものが多く、Ⅴ期を中心とする時期に横穴群の構築が行われたものと思われる。しかし、横穴によっては出土遺物に、上限から下限までかなりの時間差が生じるものが見受けられるが、これらについては、横穴構築後の供献や追葬等も考えられ、今後、検討を要するものと思われる。

(注)「埋蔵文化財調査研究報告Ⅰ」（蓮ヶ池横穴群　—遺物編—　）1987　宮崎県総合博物館

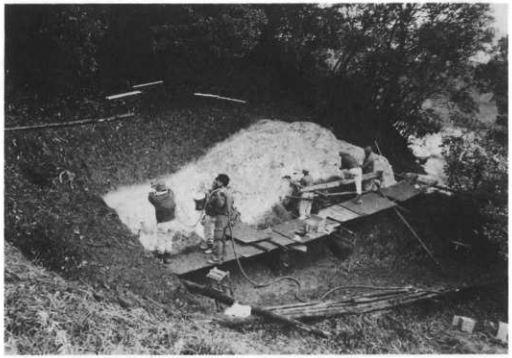
図　　版

図版47　2号～5号横穴保存工事（着手前全景）

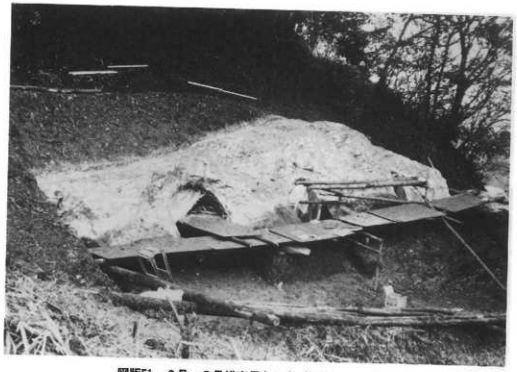


図版48　2号～5号横穴保存工事（ステンレス骨組支柱）

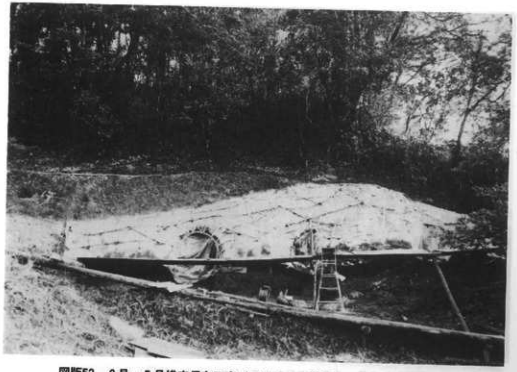
図版49　2号～5号横穴保存工事（下地ＦＲＰ貼付作業）



図版50　2号～5号横穴保存工事（下地ＦＲＰ貼付作業）



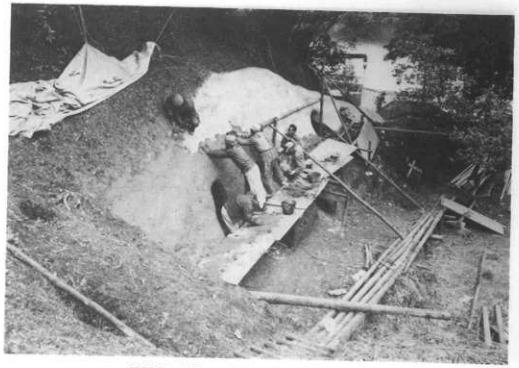
図版51　2号～5号横穴保存工事（下地ＦＲＰ貼付）



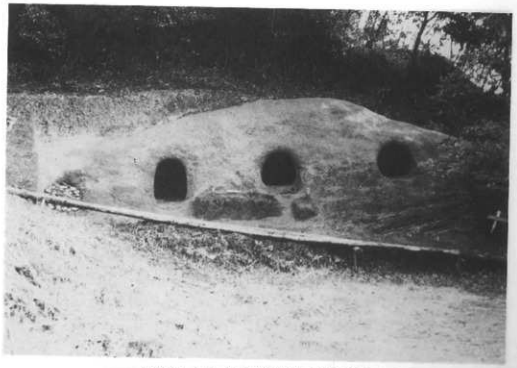
図版52　2号～5号横穴保存工事（下地ＦＲＰ貼付後のステンレス骨組み）

図版53　2号～5号横穴保存工事（発泡ウレタン吹付）

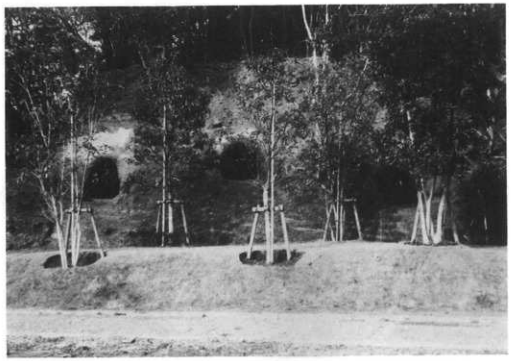
図版54　2号～5号横穴保存工事（発泡ウレタン被覆ＦＲＰ貼付）



図版55　2号～5号横穴保存工事（擬土貼付）



図版56　2号～5号横穴保存工事完了全景



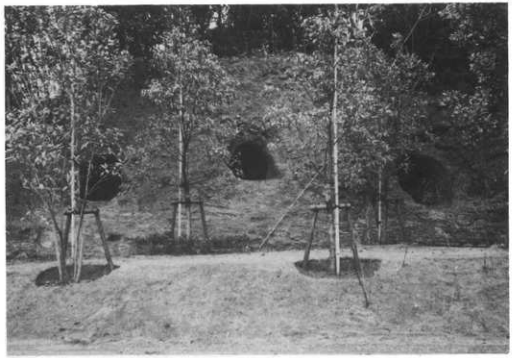
図版57　6号～8号横穴保存工事完了全景

図版58　8号横穴保存工事（擬土貼付前のステンレス金網取付）

図版59　8号横穴保存工事（発泡ウレタン吹付）

図版60　6号横穴保存工事（下地ＦＲＰ貼付後のステンレス骨組み）

図版61　6号横穴保存工事（下地ＦＲＰ貼付）



図版62　6号～8号横穴保存工事着手前全景

図版63　修景工事（70号～72号横穴前庭広場着工前）

図版64　修景工事（73号横穴前庭広場着工前）

図版65　修景工事（16号～21号横穴前庭広場着工前）

図版66　修景工事（16号～21号横穴前庭広場暗渠付設）

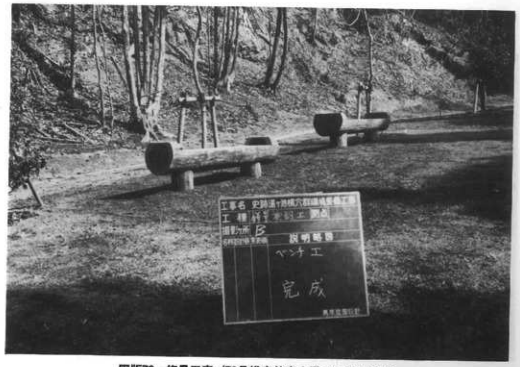
図版67　修景工事（16号～21号横穴前庭広場張芝作業状況）

図版68　修景工事（植栽樹木計測状況）

図版69　修景工事（70号～72号横穴前庭広場張芝他完成）

図版70　修景工事（73号横穴前庭広場張芝他完成）

図版71　修景工事（16号～21号横穴前庭広場張芝他完成）



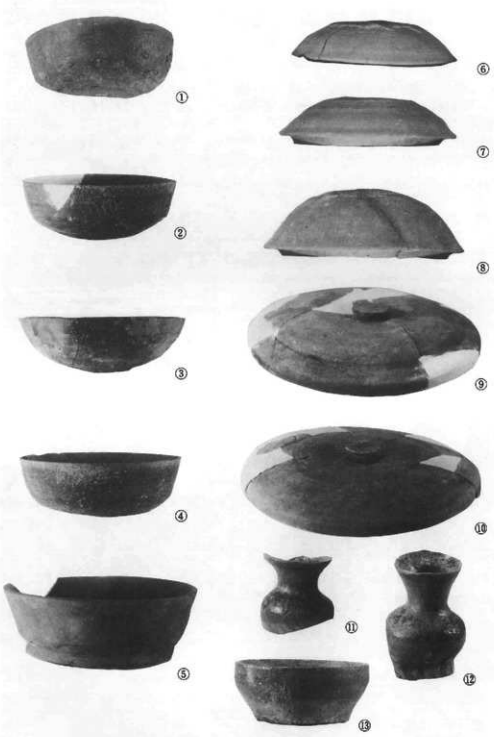
図版72　修景工事（73号横穴前庭広場ベンチ工完成）

図版73　修景工事（70号～72号横穴前庭広場四阿完成）

図版74　修景工事（70号～72号横穴前庭広場完成）

図版75　修景工事（73号横穴前庭広場完成）

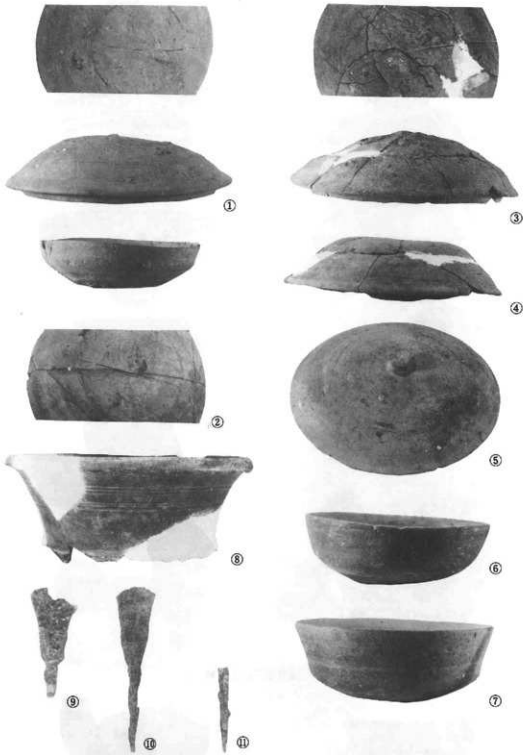
図版76　修景工事（16号～21号横穴前庭広場完成）



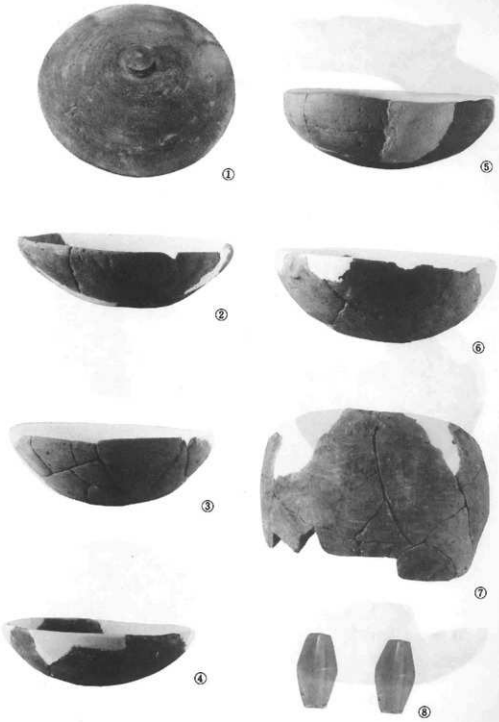
図版77　26号横穴出土遺物 (1)

図版78　26号横穴出土遺物 (2)

図版79　27号横穴出土遺物

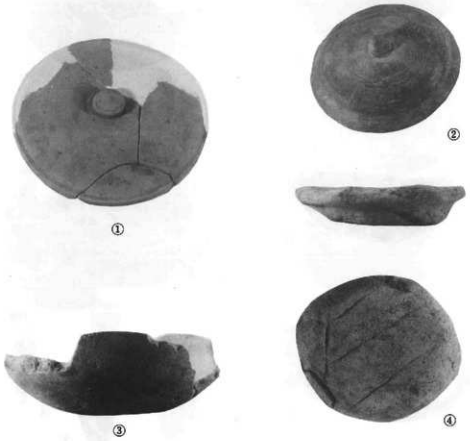


図版80　28号横穴出土遺物



図版81　32号横穴出土遺物

図版82　32号横穴出土遺物



図版83　74号横穴出土遺物

蓮ヶ池横穴群

保存整備事業概報Ⅲ
(昭和63年度計測調査概報)

平成元年3月31日

編集・発行　宮崎市教育委員会
印　　刷　愛文社印刷所